

帝国農会幹事 岡田温(8)

—— 帝国農会幹事時代② ——

川 東 埤 弘

目 次

はじめに

第1章 大正10年

第2章 大正11年(以上, 前号)

第3章 大正12年

第4章 大正13年(以上, 本号)

は じ め に

前稿¹⁾で、帝国農会幹事・岡田温の帝国農会幹事時代(大正10年4月～昭和11年9月)の活動のうち、大正10、11年を考察したが、本稿では、12年から13年までの温の活動について考察することとする。本時期は、第一次大戦後の農業・農村不況が深刻化し、帝国農会は、農業、農民、農村危機打開のために、下からの農政運動、農村振興運動を盛り上げていき、温がその中心的役割をになっている。

第3章 大正12年

大正12年(1923)、温52歳の年である。帝国農会の幹事を続けている。しかし、まだ、愛媛県農会技師を続けており、その仕事も残っており、極めて多忙であった。本年は大戦後の農業、農民、農村の危機に対し、農村振興運動

1) 拙稿「帝国農会幹事 岡田温(7)―帝国農会幹事時代①―」(『松山大学論集』第18巻第1号, 2006年4月)。

(農家負担の軽減問題, 米価維持, 農務省独立化等)や農業経営調査等に取り組んだ。また, 本年は, 関東大震災の年で, 興味深い災害の記事も見られる。

第1節 帝国農会幹事活動関係

本年の正月, 温は故郷の石井村で過ごした。帰郷中, 温は県農会に出勤し, 業務を行った。温は1月4日から県農会へ行き, この日は午後3時からは道後大和屋にて門田晋, 多田隆, 宮脇茲雄ら県農会関係者と会合し, 中央における減税運動(農家負担の軽減)の経過について話し, 6日には郡市農会役職員協議会の協議案を考究, 10, 11日の両日は県農会主催の郡市農会役職員協議会を開催し, また, 技術者養成処生徒への講義等をした。

1月12日, 温は再び帝国農会の幹事として活動するため, 10時高浜発の第12宇和嶋丸にて上京の途についた。途中香川, 三重に立ち寄り, 公務, 講演をしている。12日午後10時高松に着し, 翌13日, 温は香川県農会主催の郡市農会役職員協議会及農民大会に出席し, 午後3時から2時間ほど, 180余名に対し「農会経営の精神」と題して講演した。終わって, 慰労会に出席し, 夜9時半発の義州丸にて上阪した。翌14日午前5時半大阪に着し, 三重県に向かい, 11時24分津に着した。そして, 15, 16日の両日, 温は帝国農会主催の講習会にて講義を行い, また, 会長代理として証書授与式も行った。終わって, その夜7時発にて上京し, 翌17日午前7時半東京に着し, 帝農に出勤した。

さて, 大正12年は加藤友三郎内閣(大正11年6月12日~12年8月26日, 貴族院の研究会中心に組閣)の下で, 地租(国税)問題が政治の焦点になっていた。加藤内閣は, 大戦後の経済不況・財政危機に対し, 第46議会の大正12年度予算案において, 財政緊縮・減税の方針を採ったが, 営業税のみ減税し, 地租についてはなんら減税を打ち出していなかった。この加藤内閣に対し, 政友会が準与党で, 憲政会と革新倶楽部が野党であった。そこで, 野党の憲政会は地租の2分減を打ち出し, また, 革新倶楽部は営業税・地租の地方税委譲を

打ち出しており、政友会側の態度が注目されていた。温が東京に帰った日の1月17日、政友会幹部が地租の地方税委譲案を表明した。地租の減税ではなかった。この日の「日記」に「政友会幹部ニテ地租ヲ地方税ニ委譲案ヲ公表セシタメ、一層混沌トナリ、小委員滞京シテ運動シツヽアリ。一方、政友会ニテハ昨年未二十八日ニ二百二十名ノ連盟調印シテ内部ノ運動ヲナスモノアリテ、形勢全ク予測スヘカラサルニ至ル」とある。帝国農会側の要望は、地租の地方税委譲ではなく、昨年10月23日の帝国農会総会や11月24日の全国農会大会で決議された「農業者の負担軽減」、即ち「地租の軽減」であった。

1月18日以降、温は農家負担軽減問題に奔走した。18日、温は農業者の負担軽減の減税問題委員会を召集し、そして、政友会の実行委員を訪問し、帝農の方針にもとづき初志貫徹せられんことを要望した。しかし、政友会は19日に地租の地方税委譲を決定した。「政友会幹部ニテ三大政綱、地租ヲ地方税委譲決定ス」。そこで、20日、温は再度帝農の減税問題委員会を召集し、26日に全国農会代表者大会を開催することを決めた。この日の「日記」に「一七県ノ委員殆ト参集…。委員会開催。午后別室ニテハ評議員会ヲ開キ、他ノ一室ニテハ委員会ヲ開キタルカ、政友会ノ幹部案ニ対スル連判組ノ実行委員ニ農会ノ希望要求及激励ノタメ議長室ニ行キ状況ヲ徴シテ帰ル。二十六日全国農会代表者会ヲ開クコトノ決定シ、直ニ各府県農会ニ打電ス」とある。また、21日には政友会の渡辺修代議士を訪問し、あと、帝国農会に出勤し、道府県農会代表者協議会の文案を作成した。22日には終日帝農で減税委員会を開催した。この日政友会総務三土忠造が帝農に来会し、政友会側の地租の地方委譲案の説明に来ている。温は三土の来会に対し、「農会ノ位置ノ向上ナリ」と記している。23日にも温は帝農で減税委員会を開催した。また、この日は、憲政会の下岡忠治も帝農に来会し、憲政会の減税方針（地租2分減）の説明に来ている。2大政党が帝農に働きかけていることが判明する。25日午後、帝農にて帝国農会の別働隊たる中央農事協会（大正11年11月設立）の評議員会があり、温も出席した。この日の「日記」に「類ニ帝国農会ノ意見ヲ要求シタルモ、単ニ溝

然ト答ヲナス。憲政会臭味多シ」とある。ここから、温ら帝国農会側は憲政会側の地租2分軽減論に対しては、「臭味」を感じ、距離を置いていることが分かる。

1月26、27日の両日、帝国農会主催の道府県農会代表者協議会が開催された。愛媛からは門田普、村瀬武夫が出席している。この農会代表者協議会では減税問題が中心議題であった。26日の「日記」に「全国農会代表者開催。一府県二名ツ、副会長議長席ニツキ午前ハ報告経過ヲナシ、午後一時ヨリ武藤、島田両政友会総務…下岡憲政会総務…、大口革新倶楽部総務ノ減税問題ニ対スル各政党ノ方針ヲ説明ス…。質議応答、午後五時右畢ツテ討議ニ移リ、委員一七名ヲ選ヒテ之ニ托スルコト、シ閉会ス」とある。27日に大会決議が採択された。この大会では政党間で暗闘があった。この日の「日記」に「府県農会代表者会二日目…。午前委員会。本日ノ会議ハ各政党ハ多大ノ注意ヲ以テ観察シ、農会ノ内外大ニ緊張ス。午後一時ヨリ本会議ヲ開キ、(一)地租委譲ヲ承認スル負担軽減、(二)米穀法運用ニヨル米価向上、(三)小農保護ヲ決議ス…。委員会ニテハ各政党的暗闘アリ。開会後、松山、門田、田倉、西村、池沢、山田ノ六人ニテ政友会幹部ニ面会シテ決議ヲ伝へ、副会長ト三幹事ハ三政党本部ニ昨日ノ挨拶ニ巡ル」とある。この全国農会大会での決議は、正確には「一、農家負担軽減ノ実現ヲ期スルコト。(一)大正十三年度ヨリ国税タル地租ヲ地方税ニ移譲スルコト、(二)大正十二年度ニ於テ応急的負担ノ軽減ヲ図ルコト。二、米穀法ノ運用ニ依リ、米ノ価格ヲ相当ニ維持スルコト。三、小農保護策ヲ樹立シ、直ニ此カ実行ヲ期スルコト。参考(一)自作農ノ維持創定ヲ図ルコト、(二)小作法ノ制定ヲ図ルコト、(三)積極的低利資金ノ融通ヲ図ルコト、(四)産業組合中央金庫ノ設立ヲ図ルコト、(五)農業補修教育ノ普及及ヒ内容ノ充実ヲ図ルコト」というもので²⁾ 帝農としては、農家負担の軽減を基本的方針としているが、他方、政友会の地租委譲案も受け入れ、配慮(妥協)していることが判明しよう。

2) 帝国農会史稿編纂会『帝国農会史稿 資料編』農民教育協会、昭和47年、1008頁。

1月29日、温は帝農にて減税問題小委員会を開催し、各政党本部及び総理、蔵相、内相、農相に対し、陳情することを決め、30日に小委員（山口、菱田、松山、管野、佐藤、後藤）及び山崎・福田幹事とともに、各政党の幹部に面会し、大会決議にもとづき、減税、米穀法の運用による米買上げ等について陳情を行った。なお、30日には、憲政会が衆議院に田畑地租2分減などの廃税法案を提出している。31日にも温は小委員とともに農相官邸を訪問し、長満農務局長に対し、米買上げ等を陳情した。

なお、その間の、1月23日に、温は帝農にて、農商務省の石黒農政課長、飯岡清雄技師、矢作副会長と来年度（大正13年度）新規事業の農業経営調査に関する協議を行っている。この農業経営調査は、大正10年から始まった農家経済調査とは別に、農業経営改善を目的とした調査で、帝国農会は大正12年度に農業経営審査会を設けるが、この会合はその準備であった³⁾

また、1月28日には、温は多忙な中、埼玉県大里郡八基村に出張した。これは、昨年末の渋沢治太郎村長（渋沢栄一子爵の生家）との約束で、同村の産業基本調査の講話のためであった。温は同村600余人に対し、村の基本調査の必要性について約1時半講話し、帰京している。

2月も温は実に多忙で、種々の業務を行った。1日は午前は八基村基本調査様式の作成、午後は衆議院に行き大口喜六議員に対し、米穀法の根本疑義について説明、また、この日、愛媛から多田隆技師が来訪し、県農会の業務について打ち合わせを行い、2日も八基村基本調査様式の作成、また、多田と協議をした。3日、衆議院に政友会が「行政及税制の整理に関する建議案」（内容は地租委議案）を提出し、また、「農村振興に関する建議案」が政友会と憲政会のそれぞれから上程されたので⁴⁾、温は傍聴にいった。この日の「日記」に「午後衆議院傍聴。政友会案（二案）上程。三土忠造氏説明。革新倶楽部の湯浅凡平氏（能弁）半ハ賛成、半ハ反対ノ演説。憲政会清水留三郎ノ反対及無所属ノ

3) 帝国農会史稿編纂会『帝国農会史稿 記述編』農民教育協会、昭和47年、388頁。

4) 『大日本帝国議会誌』第14巻、536～548頁。

田淵豊吉氏ノ演説アリ。次ニ農村振興案ニツキ先ツ憲政会提出ハ下岡氏，政友会提出ハ小川平吉氏説明ス」とある。5日は帝農評議員会を開き，矢作栄蔵副会長，志村源太郎，横井時敬，原熙，斎藤宇一郎，山口左一，伊藤広幾の委員が出席し，産業組合中央金庫問題を審議し，設立要項を決め，政府及び各政党に建議することを決めた。6日は午前農商務省の飯岡清雄と農業経営審査会の委員の選定を協議し，また，午後は農商務省に出頭し，自作農創定計画の説明を求めている。7日は午前石黒忠篤農政課長を私邸に訪問し，農業経営審査会委員の人選について協議し，あと出勤し，自作農創設に関する調査をし，夕方午後5時から政友会所属の農村問題委員の招待会に列席。8，9日は自作農創設案の考案等をし，また，9日に矢作副会長から産業組合中央金庫に関し，高橋政友会総裁及び政友会最高幹部との密会の内容を聞いている。10日は温は嘔吐，頭痛のため休養し，11日も終日在宅，12日も気分勝れず，欠勤した。13日は出勤し，産業組合中央金庫の件につき，矢作副会長宅にて3幹事と協議し，あと，矢作副会長，山崎延吉とともに政友会の床次竹二郎宅を訪問した。

2月14日，埼玉県の深谷に八基村産業基本調査の指導のために出張し，同村の調査員に調査票の説明を行い，終わって，高崎に向かい，翌15日は群馬郡農会主催の高等農事講習会で，午前9時半より午後4時半まで約6時間にわたり，現在の農政と農業組織，農会の活動，昨年来の減税運動の経過等について講義した。そして，午後5時過の高崎発にて帰京の途についた。

2月16日，帝農に出勤し，夕方農政研究会幹事会を開き，矢作副会長，玉利喜造，山田敏，斎藤宇一郎，中倉万次郎，天春等の元老連らと，農務省の独立，米穀法等について協議を行った。17日は中央帝にて福岡の炭坑地問題で会合，18日は終日自宅で伊予日々新聞の投稿原稿（減税問題の一転期）の執筆，19日は帝農評議員会を開催し，矢作副会長，横井時敬，桑田熊蔵，原熙，山田恵一，秋本喜七，伊藤広幾の委員が出席し，温が去る5日の評議員会以来の時事問題の報告をしている。20日には貴族院の農政懇談会に矢作副会長らとともに出席し，時局農業問題の対策を協議した。21日は減税問題について

の原稿の執筆した。

2月22日の夜、温は山形県に出張の途につき、翌23日朝6時山形に着し、10時より12時まで自治講習処にて、家と村を基礎として農家生活問題について講話し、午後は県公会堂にて稲作品評会授与式に臨み、講演を行い、24日も午前は自治講習処にて講演し、午後は地主総談会にて、地主の覚悟について2時間ほど講演した。終わって、夜の11時発の急行にて帰京の途に着き、翌25日午前10時帰宅した。

2月26日、帝農に出勤し、午前中央農事協会の委員とともに食糧局を訪問し、副島千八食糧局長に対し、今回の米の買上げについて陳情を行った。この日の「日記」に「局長ノ方針ヲ聞ク…。副島局長ノ意見ハ明晰徹底セルカ如キハ反対意見ヲ挟ム余地多シ。然シ今日ハ事情、陳情ノ目的ナリシヲ以テ挨拶ヲナシ帰ル」とある。なお、この日、衆議院で、地租地方委議建議案、農村振興、農務省独立建議案が可決されている。27日は衆議院に渡辺修代議士を訪問し、小作調停法について希望意見を述べた。渡辺によると、政友会の最高幹部及び代議士連中の中には小作調停法に反対の意見を抱くものが多く、政府（加藤内閣）は今回は提案しないとの情報を得ている。そのため、28日、中央農事協会の委員が高橋是清政友会総裁、小川平吉政友会総務に小作調停法について陳情したが、政友会は小作調停法は小作争議を促進するといひ、絶対反対の態度であった。この日の「日記」に「農事協会連中ハ高橋総裁及小川総務ニ小作調停法問題ノ運動ヲナシタル。報告ニヨレバ、政友会最高幹部ハ絶対的ニ反対ノ由、其理由ハ該法案ハ未発生地ニ争議ヲ起サシムルノ恐レアリ。他面ニハ争議ニ対シ判決権ナキタメ法律ノ權威ナキモノト云フニ在リ」とある。

3月も温は多忙で、農業経営調査等、種々の業務を行った。1日、帝農は会務分担機構の変更をしている。従来の庶務部（福田）、事業部（第1部＝調査部、岡田、第2部＝地方部、山崎）を改め、総務部（山崎）、調査部（岡田温）、給与金部（福田）とした⁵⁾。また、旧幹事室を応接室とし、旧小会議室を調査部室とし、温がそこに移転している。2日には、山田歙の依頼で、大蔵省の農・

工・商負担調査への反駁文を執筆し、3、4日は「再ヒ米穀法ヲ論ス」を執筆、また、5日も農・営業者の負担の執筆をしている。7日は農商務省に石黒忠篤農政課長を訪問し、農業経営調査の件について打ち合わせ、8、9日は1月末の全国農会代表者会議以後の経過報告案の執筆、また、午後石黒農政課長を訪問し、農業経営調査の打ち合わせ等を行った。10日は農科大学実科独立建議案の委員とともに帝国大学農科大学を訪問、また、夜は6時より日本橋の偕楽園にて、貴族院の勅撰議員となった志村源太郎（大正11年12月より）、道家斉（大正12年3月より）両氏を招き、評議員一同にて祝賀会を催している。11日は矢作副会長とともに埼玉県浦和町に出張し、女子師範学校にて開催の埼玉県人会に出席し、温は税制改正について約1時間ほど講演した。終わって、午後6時帰京し、ただちに帝国農会に行き、農業経営に関する協議会を開き、矢作副会長、石黒、飯岡及び幹事らと大綱を協議。12日は農業経営に関する方法の執筆、夜は午後6時より東京会館にて政友会所属の農政研究会員（50余名）の集会に列席した。この日に農村振興同志会が成立した。温は「日記」に「当夜、農村振興同志会成立ス。従来屢会合サレタル農村問題ノ会合中、最モ熱心且ツ正当ノ議論多シ」と記している。13日は農業経営設計様式を作成し、夜は午後6時より鉄道協会にて横井時敬主催の貴族院議員招待会に出席した。しかし、堀田正恒、米津政賢両氏が出席しただけで、温は「日記」に「先生ハ人望ナシ」と記している。14日も農業経営設計様式を作成し、また、矢作副会長と農会代表者会議の開催についての協議を行った。また、農商務省の食糧局の馬場由雄事務官を訪い、今後の米買上げ方針を聞いている。それによると、当日迄の買上は4万4、5千石で、今後買上げをしないという。15日、温は矢作副会長と17県委員会を開催することを協議した。また、この日、全国町村長会役員9名（金子、福沢、大嶋、小岸、佐藤、山田、佐藤など）が来会し、地租委譲問題その他について打ち合わせを行った。16日は河上哲太代

5) 『帝国農会史稿 記述編』232頁。『帝国農会史稿』の記述では4月1日に会務分担機構の変更となっているが、温の日記により、3月1日であった。

議士（政友会）を訪問。17日は農業経営設計書の考案、また、午後3時より水交社にて玉利先生の招待会に出席。また伊予日々新聞（減税問題の進展）と農界時報（第46議会の農政問題）に原稿を送付。19日は飯岡清雄技師と農業経営審査会への提案について終日協議をなした。20日は農業経営設計書の考案、21日は帝農にて佐藤寛治博士、飯岡清雄らと農業経営調査に関して内部研究、打ち合わせを行った。23日は水戸に出張し、茨城県町村農会長会に出席し、午後1時10分より2時50分まで「現下ノ農政問題」について講話をした。終わって、3時20分発にて帰京の途につき、7時5分上野に着した。24日、帝農にて、17県委員会を開催し、温は1月以来の活動報告を行った。そして、午後3時より、委員一同と衆議院に行き、政友会の武藤、中島、憲政会の下岡、高田、革新倶楽部の大口、西村議員に面会し、陳情した。特に、政友会幹部に対しては地租地方委譲の約束の実行と、米の買上げ等について陳情した。25日には、午前8時半、委員一同と農相官邸に行き、荒井農相に面会し、米の買上げ方を要請した。荒井農相は、今後100万石に達するまで買うことはしないが、価格その他異常を生じ、調節の必要を感じたときには買上げをなす考えだと答え、さきの副島局長よりは理解があった。26日は農業経営設計様式の考案。27日から3日間、帝農にて農業経営審査委員会を開催した。委員は農商務省より石黒課長、飯岡清雄ら7名、学者側から佐藤寛次、横井時敬、安藤広太郎、原熙、那須皓ら、地方篤農家側から清水及衛、宗豫利吉らが出席し、矢作副会長が議長となり、終日討議した。その結果、小委員会を結成し、安藤、那須及び地方の委員に具体案の研究を托すことになった。28日、農業経営審査会の小委員会を開催した。この日の「日記」に「農業経営審査…小委会。地方出身者ト安藤氏ト那須氏ト…。帳簿ヲ遺スノ外、略決議シタルモ、根本意見ニ差異アリ。但シ、相互意見ノ交換トシテ大ニ研究トナリタリ」とある。また、この夜、帝農評議員会も開催し、原熙、横井時敬、山田恵一、山口左一が出席し、全国農会代表者会議の開催の可否等の協議をしている。29日にも農業経営審査委員会を開会した。昨日の小委員会の決議を付議したが、決議と

はせず、更に特別委員を選び十分考究し、成案作成の上、委員会を開くことにし、一切を帝国農会に一任することにして閉会した。

4月も温は多忙で、種々業務を行った。1日午前6時50分東京駅発にて、静岡県に出張の途につき、11時30分鈴川につき、富士郡吉原町小学校にて、町村長、農会長ら400余名に対し、午後1時より約3時間、農村問題考察の基礎要件について講話を行い、さらに居残りの10数名に対し、午後5時まで改正農会法について質疑応答をなした。あと、大宮町に向かった。翌2日は大宮町小学校にて、450余名に対し、11時半から約3時間、現下の農政問題について講話を行った。3日は大宮町から志太郡藤枝町に行き、高等女学校にて、530余名に対し、午後1時半より4時まで、農村問題の基調について講話を行った。終わって、温は浅沼神社参拝の後、11時50分発にて、帰京の途につき、翌朝午前5時半東京に帰着した。

4月5日帝農に出勤し、農業経営設計要項の再考、その他雑務を行った。9、10日の両日、帝農にて農業経営審査特別委員会を開催した。矢作副会長、安藤、那須、佐藤、林、飯岡、石黒らが出席し、議論した。飯岡清雄が頑固であったが、結局妥協し、まとまっている。9日「飯岡君ノ頑固ナルタメ、議進マサリシカ、本日ハ稍進ミタリ」。10日「種々ノ議論アリシモ、結局、農商務省ノ讓歩ニヨリ進捗ス」。

4月12日、帝農は道府県農会代表者協議会を開催した。各府県農会より代表者1名が出席した。温は1月以来の議会対策、農業問題の経過を報告し、今後の対策について論じた。この協議会では「農村問題今後ノ対策ニ関スル決議」(運動の継続、全国農会大会の開催、米の買上げ)、「農業経営審査会ニ対スル希望」(各道府県農会に煩瑣なる事務を負わせることは避けること)が決議された⁶⁾。このあと、矢作副会長が3幹事を招集し、内部事務の打ち合わせを行った。矢作副会長は山崎幹事が地方によく外出することに対し、不満を持ってい

6) 『帝国農会史稿 資料編』1009頁。

た。この日の「日記」に「副会長…三幹事会ヲ開会シ、内部事務ノ打合会ヲ開ク…。実ハ山崎氏終始外出ニ副会長不満ヲ抱キタル結果ナリ」とある。

4月13日、帝農にて農業経営審査委員会を開き、安藤委員が特別委員会の決議を報告し、審議の上了承し、帳簿に移り、特別委員会に一切を任すことを決めた。翌14日に特別委員会を開催し、帳簿の審議を行い、決定した。

4月17～19日、温は埼玉県の八基村調査に従事した。17日午前7時20分上野発にて八基村の産業基本調査のために出張し、10時過ぎ八基村に着し、午前中は役場にて集計の手伝い、午後は村内を巡視した。宿泊は渋沢治太郎村長宅であった。18日は篤農家の尋問調査を行い、19日は集計方法の指示などをした。ただし、最も重要な調査事項は帝国農会に持ち帰ることとし、深谷駅5時発にて帰京した。

4月20日、帝農は新たに職員（永井彰一、東浦庄治、赤松清一郎等）を採用し、辞令を交付している。午後は農相官邸にて小作制度調査委員会があり、出席した。小作調停法の経過が報告され、また、この小作制度調査委員会については官制を定め、公式のものとするとの報告があった。

4月22日は日曜日で、温は来る愛媛県農会役員改選について、門田晋愛媛県農会幹事に対し、会長には深見寅之助（愛媛県選出の衆議院議員、政友会）の希望を排し、第1案門田晋、第2案会長日野松太郎、副会長門田晋との意見を送っている。ここから、深見が時期会長を狙っていたことがうかがわれ、温は嫌っていたことが判明する。

4月27日、温は愛媛県農会総会出席等の業務のため、午後5時東京を發し、帰郷の途についた。なお、矢作副会長からは、岡山、滋賀の共同経営、小作問題、大原の調査などをして来るようにとの指示があった。翌28日午後7時過ぎ高浜に着し、帰宅した。

4月30日、温は県農会に出勤し、門田晋幹事と臨時総会における役員選挙の件、根本技手採用、その他について内談をし、5月1日県農会に出勤し、雑務を行った。

5月2日、温は北宇和郡へ出張した。船中にて講演要項を考案し、午後7時過ぎ宇和島に着し、蔦屋に投宿した。翌3日、温は郡役処楼上にて、郡農会議員、町農会長及技術者、町村青年団長ら130余名に対し、午前11時より午後4時まで講話し、終わって、7時発の第13宇和島丸にて帰途についた。

5月4日は県庁を訪問し、県税附課について聴き取り、5日は春祭で在宅、6日は叔父の岡田義朗より今在家田買取の交渉、等。

5月7日、愛媛県農会の臨時総会を行い、5名の選考委員を選び、新役員を選出した。県農会長には幹事の門田晋が就任した。温の意の通りであった。この日の「日記」に「臨時総会…。役員選挙。今回ハ上甲君ヲ除クノ外ハ政友系ニテ党争ハナキモ元老株多キタメ配置ニ困難シ、会長ノ外ハ二年交迭トス…。形式ハ道後岩井ニテ中食ヲナシ、選衡委員五名、鶴本、太宰、日野、亀岡（現会長ノ意ニテ）、自分ノ五人ニテ次ノ如ク選衡ス。会長門田晋、副会長日野松太郎、大野助直、帝農議員小野寅吉、太宰孫九、帝農議員予備稲垣熊市、評議小野寅吉、武知雅一、高橋三保、稲垣熊市、松平梅太郎。会畢ツテ梅ノ舎ニテ高山、河上両代議士ノ政友会有志ノ歓迎」とある。

5月8日から温は南予の諸郡に講演に出張した。8日は喜多郡大洲に行き、公会堂にて11時より午後4時まで講演し、5時より公会堂にて、高山、河上両氏代議士の歓迎及び温の慰労会を催し、出席。9日は大洲を出発し、東宇和郡宇和町に行き、郡役所楼上にて、午後1時より4時半まで講演、終わって、夜、山松屋にて慰労会。10日は八幡浜に行き、天理教にて、午後1時半より4時半まで講演。終わって酔月にて慰労会。夜11時発の郡山丸にて帰松の途につき、翌11日午前9時高浜に着した。

5月12日、温は再び、帝農幹事として、上京の途についた。途中、大原奨農会、藤田農場等を視察した。この日、石井一番の列車にて出発。高浜から船に乗船し、午後1時尾道に上陸し、倉敷に向かい、大原奨農会を訪問し、農場を視察した。13日は児嶋郡興除村の藤田農場を視察し、14日は滋賀県大津に行き、滋賀県の物産陳列場を視察などをし、6時半上東し、翌15日午前7時

半着京した。

5月15日以降、温は帝農に出勤し、種々の業務を行った。16～19日は農業経営調査略式の考案、那須皓と米価問題等について協議等をなし、21～23日の3日間は農商務省にて、農業経営調査につき府県農会技師会を開催した。また、その間の22日には帝国農会にて政友会の井上角五郎、西村正則、吉植庄一郎、匹田鋭吉らが来会し、3幹事臨席の上、当面の農村振興策について協議し、一農務省の独立、二地租委譲の実行、三米価調節、を当面の主要問題とし、これに低利資金の融通、小作争議の解決、耕地整理の国営化を決めている。24日からは帝農主催の農業経営長期講習会が始まっている。

5月28日は帝農評議員会を開き、副会長、志村、横井、桑田、山口らが出席し、来る農会大会に、一農務省の独立、一地租委譲の実現、一主要食糧の国策確立、を提案することを決めた。29日は農業経営基本調査様式及び序文の執筆、30日は農村振興策の基調の執筆を行った。5月31日、6月1日は温が農業経営長期講習会の講義を行った。

6月も温は種々多忙であった。3日は農村振興策の原稿執筆、中央農事協会評議員会に出席、また、農会大会準備を行い、4日も農村振興策の目標を書き上げ、また、中央農事協会評議員会、農政振興同志会に出席した。

6月5日、帝国農会は丸ノ内商工奨励館にて10時より全国農会大会を開催した。全国から600余名が集まり、愛媛県からは門田晋、宮脇茲雄、宮内長、日野松太郎、工藤養次郎、上甲香、稲垣熊市ら8名が出席した。この日の「日記」に「全国ヨリ六百余名集会…正十時ヨリ開催…宣言及決議。後、政友会ノ小川平吉氏地租委譲ニ付政友会ノ所信ヲ述へ、次ハ出席ノ意見又ハ質問…。午後ハ井上角五郎、高田耘平、上原〔植原〕悦次郎、横井博士…来会者十余名演説…。午後三時閉会。三時半ヨリ山梨県出席者若尾謹三外七名ノ招キニテ陶々亭ニテ食事ヲ供ニシテ帰ル」とある。なお、この大会での「宣言」は「農村ノ不振、農民ノ悲惨ハ正ニ其極ニ達ス。故ニ農村振興ノ急務タルハ最早論議ヲ許サズ。正ニ其ノ実行ヲ期スベシ。時ハ恰モ政府カ予算編成ノ期ニ際ス。茲ニ全

国農会大会ヲ開催シ、農民ノ宿望ヲ貫徹スヘク最善ノ努力ヲ輸サントス」であり、また、「決議」は「一、直ニ農務省ノ独立設置ヲ期ス、二、農民ノ負担ヲ軽減スヘク大正十三年度ヨリ地租ノ地方団体委譲ヲ期ス、三、主要農産物ニ対シ根本政策ノ確立ヲ期ス、一、来ルヘキ衆議院議員選挙ニハ農業ニ理解アル者ノ選出ヲ期ス」というものであった⁷⁾。農村の危機を背景に、政界に農会関係者を送り出すことを決めた。

6月6日に道府県農会代表者協議会を開催した。この協議会で、中央農事協会を解散し、農政運動の新団体として「帝国農政協会」の設立を決めた。この日の「日記」に「道府県農会代表会…。昨日ノ大会出席者郡代表中ヨリ一名ト道府県農会ヨリ一名トノ出席者ノ指定ナリシニ一府県ヨリ数名ノ出席アリテ盛況。先ツ帝国農政協会ノ設立…中央農事協会ノ解散…ヲ諮リタルニ、大森、田倉反対シ、形勢不穩…正午漸クマトマリ、十六名ノ委員ニ托シテ其要項ヲ議シ、一面ニハ各自ノ意見ヲ(十分間)述フ。午后四時一切議了…。明日ノ各方面訪問ヲ決議シ閉会ス」とある。帝国農政協会は帝国農会の別働隊で、帝国農会を調査研究団体とし、帝国農政協会は「農政に対する根本政策の遂行を期する」ことを目的とした農政運動団体とした⁸⁾。翌7日には、各府県より1名ずつ出席し、総理大臣、大蔵大臣、農商務大臣、政友会、憲政会、革新倶楽部の各本部を3組に分かれ訪問し、大会の決議を陳情した。温は、一行を率い、農商務大臣と憲政会本部を訪問し、陳情した。また、9日にも残留の地方の農会代表委員とともに大蔵次官を訪問した。

全国農会大会以降も、温は原稿の執筆や種々雑務を行った。9～10日は農政研究会の求めに応じ、「農会の本領」の原稿を執筆、11日は、矢作副会長、斎藤宇一郎、3幹事と協議、また、飯岡清雄技師と大経営と協同経営の指定県の協議、13日は農村生活調査要項を考案、14日午前は農業経営長期講習会の講義、午後は生活改善資料調査表の考案、15日は3幹事と帝国農政協会の規

7) 『帝国農会史稿 資料編』1010頁。

8) 系統農会史編纂会『系統農会を中心とする農政運動資料』昭和28年、197頁。

則を協議，16日は郡制廃止と農会事業の消長等の調査，17，19日は農業組織の販売組織の原稿執筆，20，21日は土地の担税能力論を執筆，22，23日は宅地々税に関する調査，24日は終日自宅にて土地の租税力を執筆，25日は農村文化生活調査研究に関する考案，米生産費調査徹底に関する予算その他の考案，26日は午前農業経営講習講義，午後農業倉庫普及奨励案を作成，また，26～29日は土地の租税能力論を執筆，等々している。

7月も温は多忙で，種々業務をこなした。1日は午前中土地担税力を執筆し，午後は駒場交友会に出席。2日は矢作副会長と来年度予算及び補助費等の協議，3日は土地の担税力を執筆し，4日～8日は来年度予算及び事業計画を考案，また，土地担税力等の原稿執筆。9日は矢作副会長と農商務省に行き，石黒農政課長，長満農務局長に面会し，来年度新事業に対する補助の要求を行った。会談は3時間半に及んだが，承諾されなかった。10日は矢作副会長と来年度予算，国庫補助其他につき協議。11日，温は埼玉県北埼玉郡農政協会（地主会）の会合に出席し，忍町公会堂において，約2時間土地の担税能力につき講演し，帰京した。12日は夜，帝農評議員会を開催。13日午前10時から帝国農政協会第一回総会を開催した。愛媛からは門田晋が出席し，夜の懇親会で，門田は温に来年度の衆議院議員選挙の候補者問題を出している。この日の「日記」に「帝国農政協会総会午前十時開会。午後ハ委員会。大森，福岡例ノ駄々子大ニ閉口ス。五時ヨリ鉄道協会ニテ招待会ヲ催フス。門田晋君ヨリ明年ノ衆議院議員ノ問題ヲ持出シ懇談ス…。岩崎氏連動費一部ヲ支出セント云フハ其意ヲ得ス」とある。翌14日の帝国農政協会総会では，規約，今後の運動方法を協議し，常務理事に一任することを決めた。「大森君ノ寄付金反対意見其他ニツキ激論ヲ生ス。又原田佐之治君ノ地租委譲論ニ対シ自分ハ駁論ヲ試ム」。

7月14日の夜11時上野発にて，温は宮城県での町村農会協議会及び帝農主催の講習会に出席のために出張した。翌15日午前9時柴田郡の大河原駅につき，旧郡会議事堂に行き，柴田，伊具，亘理の3郡の町村農会協議会に出席し，講演。午後4時に終わって，石ノ巻に向かった。16日には石ノ巻中学校に行

き、町村農会協議会に出席し、講演した。17日は石ノ巻から古川町に行き、高等女学校にて古川町町村農会協議会に出席し、450余名に対し、講演した。終わって、嶋子町に行き、宿泊。18日は桃生郡鳴瀬村に行き、自作農、篤農家を視察。終わって、栗原郡築館町に向かった。19日は築館町の公会堂にて町村農会協議会に出席し、200余名に対し、講演。終わって、登米郡佐沼町に行った。20日は登米郡役所にて町村農会協議会に出席し、400余名に対し講演。終わって、仙台に向かった。21日は午前10時より県会議事堂にて、仙台を中心に名取、宮城郡の農会関係者200余名が出席し、温が午後1時より4時40分まで講演をした。本年宮城県では冷夏に見舞われている。この日の「日記」に「宮城県ハ挿秧以来雨、曇天、低温続キ、稲作ハ有効分げつ期ヲ過キ、例年ヨリ不出来ニテ、大正三年ノ六分作、三十八年大凶作ノ如キナキカヲ恐レ、本日農業関係者ニテ対策ヲ講ス」とある。22日は名取郡玉浦村の大地主・安久津庄七宅（13町歩）を訪問し、視察した。23日から25日まで宮城県公会堂にて帝国農会主催の講習会を開催した。320名が出席し、矢作副会長、温らが講義した。講習会が終わって、仙台の名所を見物し、夜、10時40分発にて帰京の途につき、翌26日上野に着した。

7月28日、午前は経営調査講習会で講義、午後は土地担税能力を執筆している。29日も終日土地担税力を執筆し、30日は農業問題の解剖の要項を執筆している。31日は経営講習会での講義。

8月、温はよく出張し、講演を行った。5日、温は群馬県新田郡太田町での夏季大学（4日より9日まで開催）講義のために、午後7時浅草駅発にて出張した。6、7日の両日、温は8時間にわたって「農村問題の解剖」と題して講義した。なお、他の講師は、上杉慎吉「憲法大意」、綿貫哲雄「社会意識」、奥梅子「婦人問題」であった。7日温は講義を終わり、午後3時50分発にて、帰京した。

8月8日、温は兵庫、香川、愛媛での各種講習会に出席するため、出張の途についた。この日午後10時東京発にて出張し、翌9日午後2時明石に着した。

10, 11日の両日、温は明石女子師範学校において、郡町村農技手ら200余名に対し、3時間余り講義した。11日終わって、温は高松に向かい、従兄弟の岡田義宏⁹⁾(新宅の岡田義朗の次男、香川県農事試験場長)宅に宿泊した。翌13日から高松の県会議事堂にて、帝国農会主催の農業政策講習が開催された。温が趣旨を述べ、午前は矢作副会長が、午後は温が講義した。14日も午前は矢作博士講義。午後は温が講義した。香川県の講習会は17日まで続いたが、温は、14日10時発の紫丸にて矢作副会長と共に松山での高等農事講習会のために松山に向かった。翌15日午前4時半高浜に着し、この日、愛媛県農会主催の高等農事講習会が始まり、温も出席した。15日は佐々木林太郎農事試験場長と木津無庵が講義し、16日は矢作副会長と木津無庵が講義し、木津は「佛教徒問題ヨリ視タル農業問題」と題して、2日間で8時間半にわたり講義した。17日、矢作博士が温の実家を訪問した。「矢作博士御来訪ニ関シ打合ヲナシ…。買物ヲシテ帰宅ス。午后二時矢作博士、石井君ト来駕サル。家族一同ヲ渉介ス…。午后四時頃御帰宿」。

8月18, 19日の両日、第22回愛媛県農事大会が開催され、出席した。大会では矢作博士が農民の負担軽減、地租委譲の可能性について2時間にわたって講演し、大会2日目の19日には、温も演説している。尚、その夜、温は石井村農政協会の協議会に出席し、農政倶楽部を農政協会に変更し、正副会長の選任(会長重松亀代、副会長大原利一)をしている。なお、重松亀代は大字井門出身の石井村会議員(大正7年1月~15年1月)、大原利一は大字星岡出身の石井村会議員(大正11年1月~昭和4年1月)¹⁰⁾

8月20日、温は東予の地主懇談会に出席するため、出張した。この日は今

9) 岡田義宏は、明治24年5月15日に新宅の岡田義朗の次男に生まれ、松山中学、熊本第五高等学校を経て、大正7年東京帝大農科大学を卒業し、同年香川県農事試験場技師に着任し、わずか2年にして農事試験場長に就任していた。11年8月に結婚。なお、のち昭和2年には朝鮮総督府に赴任し、農務部長や農事試験場長等を歴任する(『わがふるさと土居町のあゆみ』336頁)

10) 『石井村史』107~109頁。

治に行き、順成舎に宿泊。翌21日10時より越智郡役所楼上における地主懇談会に出席した。来会の地主80余名に対し、坪井が講演し、温も意見を述べた。翌22日には、坪井らとともに西条に行き、公会堂における新居郡農会主催の地主会に出席した。来会の西部の地主70余名に対し、坪井が講演した。翌23日には新居浜に行き、泉川村農学校にて新居郡農会主催の地主会に出席した。来会の東部の地主70余名に対し、坪井と温が講演した。終わって、西条に帰り福亭に宿し、翌24日松山に帰っている。25日は温泉郡役所楼上にて中予地区の地主懇談会に出席した。伊予・温泉両郡の地主70余名が出席し、坪井が約4時間半にわたって講演した。両郡にて小作制度研究会組織の相談をし、終わって梅の舎にて慰労会があり、出席した。9月1日朝、石井村農協协会会长で村会議員の重松亀代が温を訪問し、村長辞任の件、県会議員選挙の件、温に衆議院議員候補の件、等を話して帰っている。

9月1日午後、温は体調不良であったが、午後2時40分高浜発にて、中国地方に講演のために出張した。この日は広島県海田市に着し、投宿した。この日、11時58分関東地方でマグニチュード7.9の大地震があった。関東大震災である。1日の日記の欄外に「東京、横浜、静岡地方大震災、大火災、大海嘯トカ」とある。2日温は安芸郡海田市の明顕寺に行き、安芸郡農会の農事懇談会に出席し、来会者450余名に対し、農村問題の考へ方と題し講演をし、終わって、三次に行った。前日の関東大震災の被害状況が号外で報道されていた。この日の「日記」に「本日号外ニテ、東京、横浜地震、大火、全焼全滅トアリ。以下報知ナク人心胸々。三次ノ宿ニテ見タル号外ニヨレハ、四谷ト芝ヲ除ク外全市焦土ト化ストアリ、又死屍累々山ヲ為ストアリ」と記している。3日、温は三次から松江に向かった。途中の木次にて、新聞を見て、東京の震災の惨状に戦慄している。「木次ニテ本日ノ大阪新聞ヲ見、東京ノ惨状愈劇甚ナルニ戦慄ス」。4日は島根県農会を訪問し、農会の業務や郡村農会の状況を聞き、あと、鳥取県気高郡浜村に向かい、梅木旅館に投宿。5日、温は午前10時より小学校にて農会長ら150余名に対し、講演。6日は鳥取市に行き、県農会を訪

問し、県下の農家の経済状態及び小作争議の状況を聞き取りしている。「東、西伯ノ小作争議ハ相当ニ時代思想ヲ以テ、小作者ハ対応ス…。弓浜六ヶ村ハ発源地ナリ」。そして、その夜10時発にて京都に向かい、翌7日午前6時京都に着した。東京への私信は未だ通ぜず、また汽車も不通のため、温は一旦松山に帰国することとした。8時半京都を出発したが、駅は東京からの被災者でごったがえし、「日記」に「京都、大阪、神戸、其他各駅ニ、東京ノ避難者ノ救済会大ニ活動ス。特ニ大阪ハ迎ヘノ者其他ニテ駅外充滿ス。プラットホームニハ握飯、茶、菓子等ヲ用意シ、施給ス」と記している。午後3時尾道発の船に乗り、帰松した。帰国後は数日間、東京の帝国農会や副会長、妹や親戚の安否を気遣いつつ、自宅で手紙、原稿を書いたり、家の修繕、庭の手入れ等で過ごした。

9月15日に、帝国農会の福田幹事からの使・赤松清一郎が温宅を訪れ、28日までに帰京するようにとの手紙を持ってきた。そこで、温は、翌16日12時自宅を出発し、松山にて食料(菓子類)、売薬等を整へ、高浜を発し、上京の途についた。17日午前11時半名古屋下車し、そして、中央線に乗った。名古屋駅は被災者でごった返していた。この日の「日記」に「大阪、京都駅ハ去ル六日通過シタルトキニ比シ、関東避難者救護閑散ノ様ナリシカ、名古屋ハ全ク状況ヲ異ニシ、市役所、佛教各派、金光教徒、在郷軍人会、青年婦人会ナトガ、各事務処ヲ構ヘ、庭内ニハ四ヶノ天幕舎ヲ設ケ、各車ニテ来ル避難者ニ茶、菓子、古着ナトヲ与ヘ…。避難者ハ非常ニ疲労シ、且ツ跣足ノモノ多シ。已十七日ノ今日、尚此ノ如クナル。以テ東ノ状況ヲ想像ニ難カラス」とある。翌18日塩尻をへて、東京に向かった。途中、上野原と与瀬の間でトンネルが破壊されており、徒歩するなど苦勞して、午後2時頃新宿についた。新宿の被害大であった。この日の「日記」に「新宿三丁目を中心ニ一帯焼失シ、其他電車通ノ地震ノ被害大ナリ」と記している。温は新宿から四谷までは電車、それより徒歩で自宅(牛込区市ガ谷田町)に帰ったが、自宅も被害大で、「宅ハ壁は大破損。屋根瓦落下ス」という状況であった。19日、温は自宅の大掃除をしたが、壁

破れて処々落ち、掃けども拂へども泥じみは除かなかつた。あと、飯田町の妹・ケイ宅、九段の勝山旅館を訪問し、神田の焼け跡をみて帰つた。温はこの日の「日記」の最後に「火事ヲ免レシ処モ地震ノ被害ハ非常ニ多大ニシテ、各戸相当ノ損害アリ」と記している。

9月20日、温は帝国農会（麹町区有楽町2丁目1番）に出勤した。帝国農会の建物は無事であったが、ここに、赤十字社本部、神田の斡旋所、中外商業新報が避難し、事業を開始していたため、大混雑をしていた。帝農は震・火災に対する農会の対策を協議し、全国農会にて約3万円を拠出し、貨物自動車2台を購入し、各販売斡旋所にて農産物の供給を行うことを決めた。温は焼跡を見ながら帰宅した。「永代橋ニ出テ上野ニ行き、本郷切通シ、本富士町ノ焼境ヲ視テ帰ル…。全クノ丸焼ニテ木ノ葉一枚植物ノ青色アルモノナシ」。21日には四谷より電車にて新宿に行き、東京女子大を訪問したが、校舎の屋根は大破し、校門に当分休校と書かれていた。22日には、中野の安井哲（東京女子大学監）、本郷弥生町の小川方に避難している八木龍一（親戚、東京帝国大学法学部卒業）等を見舞っている。

震災の混乱の中、9月22日夜、温は中央本線廻りで福岡に出張した。23日、金沢、京都をへて、24日11時20分博多に着した。25日、福岡県農会における九州農会協議会に出席した。そして、翌26日午前6時30分発急行にて、東京に引き返した。東海道線に乗り、沼津駅まではさしたる被害がなかったが、御殿場以東は家屋の倒壊が見られ、駿河駅では紡績工場の倒壊をみ、最もひどかったのは松田、国府津で、人家が殆ど倒壊していた。線路が寸断され、谷蛾・山北間は徒歩し、27日午後8時東京に着した。

9月28日、帝国農会で在京評議員会があり、横井時敬、原熙、志村源太郎、桑田熊蔵、山口左一、斎藤宇一郎、秋本喜七の各委員が出席し、明年度予算及び建議案を決議した。終わって、矢作副会長より、会長、副会長問題について相談をうけている。来る帝国農会総会での役員改選のことであった。29日以降、温は震災見舞い、震災視察、対策等を行っている。29日は久松家を訪問

し、内藤家令に震災の見舞いをした。30日は焼跡視察のため、御茶ノ水、万世橋、神田、浅草を訪れた。浅草は焦土化していた。「花ノ浅草モ観音様ノ外ハ焦土トナリ、惨憺タリ」。10月2日、温は神奈川県農会を訪問し、震災見舞いとして、用紙類や砂糖などの日常品を贈呈し、横浜の震災跡を視察した。横浜は「東京ニ比シ一層残酷ナリ。南京町ニテ婦人ノ死体ト子供ノ足首付ノ靴ヲ見ル。悲惨々々」という有様であった。3日は大塚に行き、同地で開催されている全国連合販売幹旋所の小売状況を視察、4日は三輪田元道、石原助熊、渡辺修を見舞い、5日は帝農において千葉、埼玉、神奈川県農会のメンバーと資金の融通、肥料の配給問題を協議、7日は「農村より視たる帝郡復活問題」の原稿を執筆、8日は矢作副会長宅を訪問し、震災農村の復興計画及び会長、副会長改選問題を協議した。10日は午前中須田町から銀座四丁目までの焼跡を視察し、午後は三浦実生食糧局長を司法省の仮事務所（農商務省の庁舎は震災で焼失のため、司法大臣官邸に移っていた）に訪問し、米問題に対する政府の方針を聞いている。11日に農商務省の米穀委員会（会長は農商務大臣・田健治郎、委員20名）が開催された。帝農側からは矢作副会長が出席した。温は矢作に米価に関する意見を具申している。この米穀委員会で、政府側は、震災で政府貯蔵米20万石、民間貯蔵米30万石が焼失したことに鑑み、50万石の米の買上げを諮問した。委員会で、矢作が現在の米の生産費（1石37円20銭）をあげ、9月12日に政府が決定した米輸入税の免除の勅令は内地米価を圧迫すると批判し、また、内地米の50万の買上げでなく、農民救済のために100万石を買上げよとの修正提案をしたが、賛成者は矢作、志村源太郎・山本梯二郎、関直彦の4人にすぎず、ブルジョア側の浜口雄幸、藤山雷太ら多数が反対し、原案通り、50万石に決まった¹¹⁾。12日、矢作副会長が温宅を訪問し、昨日の米穀委員会の状況を聞き、また次期の帝国農会長問題について協議している。そのあと、温は三浦食糧局長を訪問し、昨日の米穀委員会の模様を聞き、

11) 『戦前における歴代内閣の米穀・食糧行政』297～331頁。

且つ府県農会に対する通知並びに尽力方を依頼されている。13日は山崎延吉、福田幹事と別々に役員選挙問題について交換、また、総会提出問題について協議。15日は産業組合中央会内の農政課（震災のため農政課が移転）に石黒農政課長、飯岡技師を訪問し、農業経営審査につき打ち合わせ。16日は司法省内の三浦食糧局長を訪問し、買上米の農会斡旋問題の真意を聞いている。18～20日は帝国農会総会の準備等を行い、22日は矢作副会長宅を訪問し、役員選挙の件につき協議した。そして、午後5時より福田幹事とともに評議員の原先生を訪問した。原先生は副会長に先輩の玉利喜造（貴族院議員、温の恩師）を推薦され、不快感を感じている。「玉利博士推挙、強談アリ…。例ニヨリ不快ヲ感ス」。23日、在京農業経営審査会を開催し、横井、加賀山、佐藤、那須、農商務省より数名出席し、すべて原案が了承された。あと、温は矢作副会長と帝農役員問題を協議した。矢作副会長は、玉利の就任に反対であった。この日の「日記」に「副会長来会。居残りテ役員問題ヲ談ス。目下ノ処副会長ハ玉利氏出スレハ副会長ヲ受ケスト談セリ」とある。

10月24日、温は午後2時20分東京発にて、京都にて開会の第14回帝国農会通常総会（震災のため、東京では開けず、京都にて開催）のために出張した。東海道線を利用したが、箱根山中の山北・谷蛾間はなお不通で徒歩している。翌25日午前7時京都に着した。27日から30日まで、京都府庁会議場にて、第14回帝国農会通常総会が開会された。27日の第1日目に会長、副会長、評議員の役員改選を行った。新会長に大木達吉が選出され、副会長は矢作の再任となった。この日の「日記」に「午前十時開会…。帝国農会通常総会…。京都府庁議堂ニ於テ…。一寫千里ニテ役員選挙ヲ行フ。即チ長田議員ノ発言ニテ会長、副会長ハ指名選挙トシ、秋本氏ヲ指名者トシ、秋本氏、会長大木達吉、副会長矢作栄蔵ヲ指名、拍手…。次テ評議員ノ銓衡委員五名ヲ指名選挙トス。池田亀次、麻生正蔵、松浦五兵衛、藤原元太郎、中倉万次郎。小憩ノ後、評議員選挙ヲ挙ク。即決スヘキ更正予算其他ヲ即決ス」とある。大木は貴族院議員、伯爵同志会会長で、政友会系である。日記中、長田（桃蔵）も秋本（喜七）も

ともに政友会の衆議院議員であり、政友会主導の下に、会長・副会長人事が決まったことがわかる。また、各農区の評議員は、東武(北海道)、八田宗吉(福島)、秋本喜七(東京)、山口左一(神奈川)、西村正則(石川)、三輪市太郎(愛知)、長田桃蔵(京都)、藤原元太郎(岡山)、山田恵一(香川)、山内範造(京都)が選出されたが、長田、東、八田、三輪は、いずれも政友会であった。このように、この大会では政友会の進出が目立った。福田美知幹事は後に『農会の回顧』で「政友会が農会を乗っ取った結果、帝国農会長に大木伯爵が就任され、従って、各地の農区選出の評議員も政友会議員の独占といふ次第になり、それまでの篤農家の評議員議員が一掃されるといふわけで、農会の組織が一変した」と述べている¹²⁾。28日、大会2日目で、大正13年度予算案、農商務省からの諮問案(農村ニ及ボセル関東大震災ノ影響及之ニ対スル意見如何)、帝農から建議案が提案され、4つの委員会に付託され、審議された。温は、米麦価維持に関する建議の委員会に出席し、また、温は各府県農会職員有志の販売幹旋問題の会議にも出席。29日は大会3日目で、午前は府県農会職員有志の販売幹旋問題の会議に出席し、午後は委員会に出席し、温が米麦価維持問題について、建議案を起草することになった。30日は大会の最終日で、午前中に、全部原案を可決した。閉会后、丸山公園のホテルで駒場同窓会があり、出席。31日には帝国農政協会(農会の別働隊)の役員会を開催し、打ち合わせ不十分で醜態をさらしたが、地租委譲に関する件、明年度の総選挙に関する件、決議事項実行委員に関する件等を協議している。夜は赤十字社楼で帝大農科大学実科の同窓会があり、母校問題の経過を報告している。翌11月1日、温は矢作副会長、山崎幹事とともに、午前8時50分発にて富山に向け出発し、福井に立寄り、松平康莊前会長に挨拶し、上京し、2日午前9時東京に着し、帰宅した。

11月も温は種々業務や出張を行った。3日飯岡技師らと販売幹旋所の件に

12) 『帝国農会史稿 記述編』228頁。

つき協議。4日には駒場に原先生（帝農評議員）を訪問し、京都の帝農総会の状況を報告した。温は「不愉快ナル義務ヲ了ス」と記している。5日は米生産費調査の検定、6日には内部事務の分担について福田幹事と協議。8日、山崎延吉幹事の進退問題について、矢作副会長、福田幹事と協議したが、矢作副会長は山崎幹事を解任することが、本人のためにも帝農のためにもよいとの見解であった。9日は参事、副参事らと協議し、帝農の会務分担を、一総務部(一)総務課、(二)会計課、(三)出版及情報課、二事業部(一)農会課、(二)農村課、(三)調査課、とした。11日には講農会報の原稿執筆、また、本所方面の焼け跡視察を行っている。16日は農産物販売斡旋所の業務のため千葉県農会及び県庁を訪問。17日は食糧局、農商務省を訪問し、本年の不作とそれに対する政府の対策について意見を述べ、19日は販売斡旋所事業方針について、幹事と協議、等々。

11月21日、温は午後7時50分上野発急行にて、北海道に講演、視察の出張の途についた。秋田、青森、函館を経て、23日午前8時半札幌に着した。24日北海道道農会事務処に行き、10時より全道各級農会役員及び技術者180余名に対し、午前、午後にわたり農会経営について講演を行った。25日は中嶋公園高等女学校における農会大会に出席し、後、植物園、ビール会社等を見学し、26日は道農会事務処にて道農政協会実行委員会の打ち合わせ会に出席した。27日は吹雪の中、札幌を出発し、石狩平野、十勝平野を視察し、池田に宿泊。28日は釧路、北見を視察し、名寄に宿泊。29日は名寄から旭川に行き、近文のアイヌ部落を視察し、札幌に戻り、そして、夜9時発にて帰途についた。30日朝6時半函館に着し、そして、7時40分発の連絡船にて青森に向かい、12時に到着し、午後1時半青森発の急行に乗り、翌12月1日午前7時上野に着した。

12月も温は種々業務や出張を行った。3日、帝農大会決議の実行委員会委員が上京し、運動方法を協議し、また、午後5時より帝農評議員会を開催し、横井、桑田、志村、安藤、山口の各委員の出席の下、松平前会長を名誉会長に、玉利喜造氏に記念品贈呈することを決めている。4日は矢作副会長、上京の実

行委員らとともに、田健治郎農相及び山之内一次鉄相を訪問し、大会決議事項を陳情した。5日以降は北海道視察の原稿、農村問題の体系の等の原稿を執筆。13日、温は玉利先生宅を訪問した。玉利先生は今回の帝国農会の会長人事に対して不満を表明している。この日の「日記」に「帝・農会長問題ハ不興ノ由」とあり、矢作と原・玉利はしっくりいっていないことが判明する。

12月18日、山本権兵衛内閣（大正12年9月2日～13年1月7日）が第47臨時議会（12月11日～23日）に提出した帝都復興予算案に対し、野党の政友会が反対の態度を決定し、翌19日の衆議院予算委員会で大削減した。そのため、議会解散の空気がみなぎっている。19日の「日記」に「臨時議会解散ノ空気漲る…。蓋シ、昨政友会代議士会ニ於テ復興予算一億三千余万円ノ大削減ヲ加ヘタルニヨル」とある。

12月19日、温は午後10時50分上野発にて農業経営講習会のために福島県郡山に出張した。翌20日朝5時50分郡山に着き、安積郡役処に行き、農業経営講習会を開催し、19県中17県の農会メンバーが出席し、午前、温が農業経営について講演した。午後は経営帳簿について打ち合わせ。終わって、午後10時50分郡山発にて、帰京の途につき、翌21日午前6時上野に着した。この日、霞町末広にて帝農の忘年会があり、出席した。

12月25日、温は和歌山県での帝国農会主催の農業経営講習会に出席するため、夜11時40分発にて東京を出発、出張した。翌26日午前6時大阪下車し、和歌山に向かい、8時和歌山についた。26日より30日まで、和歌山県県会議事堂にて、関西22府県の農会関係者80余名が出席し、温が終日農業経営について講義した。27日も温が午前中生活問題について講義した。終わって、午後1時和歌山を出て、神戸に向かい、5時発の安東丸に乗り、帰郷の途についた。なお、この日午前、摂政の皇太子が第48議会開院式出席の途中、虎ノ門の近くで難波田大助に襲われる事件が発生した（虎ノ門事件）。温は「日記」に「虎ノ門ノ大不敬事件突発ス」と記し、また、山本内閣はその責任をとって総辞職している。そのような中、温は28日午前8時高浜に着し、帰宅した。

そして、年末、家族と新年を迎える準備をした。

第2節 講農会、東京帝大農学部実科独立運動関係

温は講農会長を続けており、また、本年、母校の東京帝大農学部実科の宇都宮移転問題が更に緊迫している。1月18日、温は駒場の原熙先生から呼び出しを受けた。原先生は宇都宮移転受け入れに「変心」し、そして、温を「勧誘」せんがためであった。温も「承諾」させられている。この日の「日記」に「駒場ニ原熙氏を訪問ス。母校問題ニツキ至急会見ノ希望アリシニヨル。自分ノ所見ヲ求メラレ様子ナリシヲ以テ、宇都宮行勧誘ヲ望ミタルニ決心ノ様子ニテ承諾セラル。蓋シ、本夕ハ学生委員十八名ノ協議会ヲ開キ宇都宮案ヲ再儀ニ付スル計画ナリシニヨル」とある。21日も原先生から呼び出しを受けた。学生総代も来て、ともに会見した。温は暗に学生に宇都宮移転を勧誘した。この日の「日記」に「午後三時半原先生ヲ訪問ス。右ハ実科問題ニ付会見ヲ求メラレタルニヨル。学生総代モ来リ会ス。暗ニ宇都宮行ヲ勸メ且ツ原氏ニ好条件ヲ懇請ス」とある。

しかし、駒場交友会（実科卒業生・在学生）はあくまで宇都宮移転に反対であった。そこで講農会長の温の立場が微妙になっている。23日の「日記」に「午後二時頃原鐵君来会、母校宇都宮実行断行ノ風聞アリトノ話ヲ伝フ…。右ニツキ直チニ古在大学総長ヲ大学ニ向ヒ意見ヲタダス。夫ヨリ泥中駒場ニ原教授ヲ訪ヒ、卒業生一同不替成ノ旨ヲ伝フ。更ニ其足ニテ神田販売所ニ於ル同窓ノ会議ニ出席ス…。自分ノ立場苦境トナル。帰途電話ニテ原氏ニ伝ヘ、却ツテ不興ヲ買ヒタリ」とある。このように、原教授の説得を受け入れた温は同窓会との間で板ばさみとなり、「苦境」に立たされた。そこで、温は24日、駒場に原教授を訪い、自分の立場を「弁明」した。「駒場ノ原教授ヲ訪ヒ、教室ニテ約三十分間談ジ、自分ノ立場ヲ弁明ス」。さらに、24日の夜、温は芝の原鐵五郎宅に中村道三郎、飯岡清雄、藤巻雪生、矢儀と会合し、温を除く4人は川瀬善太郎農学部長を訪問した。そこで、飯岡らは、川瀬学部長に「何故に宇都宮

へ合併せなければならぬのですか」「駒場に於る実科の貢献を認めずして光輝ある歴史をふみにじるとは何故ですか」などと詰問している¹³⁾。25日、温は川瀬農学部長あてに、母校宇都宮移転問題について、次の内容の文書を郵送した。「(一)理想案ナレハ無条件ニテ断行シテ可ナリ。(二)宇都宮案ハ理想案ニアラスシテ二善三善案ナリ。(三)次善案ニテモ在學生、卒業生其他関係者ノ多数ノ賛成アラハ断行シテ可ナリ。(四)賛否ノ多少ヲ決スルニハ相当ノ形成ヲ備ヘタル手續ヲ履行スルヲ要ス。然ラサレハ他日大過ヲ生スルノ恐アリ。断シテ不可ナリ」。即ち、温も再び、宇都宮移転に反対の立場に戻った。

1月28日、農学部教授会の日であった。「本日ハ駒場ニテ実科ノ宇都宮行ヲ決スヘキ教授会開催ノ日ナリ」。しかし、教授会は宇都宮移転を決定できなかった。29日の「日記」に「29日夜、実科生上田弘一郎君帰訪。実科問題ノ真相ヲ聞キ、學生ハ宇都宮案ヲ全然否認シ、為ニ川瀬、原氏ノ意見ノ変化セルヤヲ窺ハル…。卒業生団ニ無断々行ハナサル意ナルヘシ」とある。

2月1日、農学部教授会が再度開かれた。宇都宮行きは否決となった。「母校問題ニ関スル教授会開會。宇都宮案ハ廃止シ、新ニ募集スルコトニ決セル由。上田弘一郎君ヨリ通知アリタリ」とある。

なお、農学部教授会で、川瀬学部長、原教授らが折れたのはなぜか。在學生・卒業生の強力な反対運動とともに、原鐵五郎副会頭の政治的手腕、即ち、高橋是清、床次竹二郎を動かす、古在東大総長、川瀬学部長を説得したためであった。少し長いが、駒場交友会『母校独立記念号』を引用しよう。「農学部に於ては、十二年の二月下旬に所謂御殿會議即ち教授会を開催して、実科の宇都宮移転を帝国大学農学部教授会決議として、構はずに実施する空気であった。此内情を仄聞したるは一二中堅幹部であったが、此者を中枢原鐵五郎氏に伝へ、之が打倒案について頭を絞ったのであるが、結局一大決心を持って非常手段によ

13) 駒場交友会『母校独立記念号』、昭和11年、65頁。なお、飯岡の回顧談で、川瀬学部長との会見の日時が大正10年2月頃とあるが、温日記から大正12年1月24日であり、飯岡の記憶間違いである。

る外なしとし、二月十七ー八日の候（日時を逸す）、原鐵五郎氏はかねての懇意の間柄たる政友会総裁高橋前首相（是清）にすぎる外なしと、先ず以て床次前内相を訪問し陳情し、即夜高橋前首相と電話にて打合せ、高橋前首相より更に電話を以て、時の大学総長たる古在由直農学博士と及び農学部長たりし川瀬善太郎博士と打合せあり。其翌日青山の高橋邸に高橋是清、床次竹二郎、古在由直、川瀬善太郎の各氏と原鐵五郎氏は会見し、原氏肺腑よりほとぼしり出づる熱誠を以て、宇都宮移転論を不可と説得し、高橋、床次両巨頭又之を支持したるが為、茲に形成一変して、古在、川瀬両大学当局は実科を駒場の地へ、若しくは不可能としても其近傍の地へ独立せしむる外なしと臍を固むるに至ったのである。翌日高橋政友会総裁は自ら議員内に於て鎌田文相を招致し前日打合せの趣旨を説明して了解を求め、大勢一変するに至った」¹⁴⁾

宇都宮移転案を葬った駒場交友会は、2月2日に、衆議院に「東京帝国大学農学部実科に関する建議案」（有馬秀雄外3人）¹⁵⁾を再度提出した。その建議は「東京帝国大学農学部実科は駒場農学校創立以来既に三十有余年此の間卒業生を出すこと実に二千六百余に及びわが産業界に貢献せること頗る大なりとす。然るに政府は盛んに各地に専門学校を創設し或は既設専門学校を昇格し、又は研究科を附設する等専ら高等教育機関の充実を図りつつあるに拘らず独り此の歴史あり且功績顕著なる実科に対して何等の考慮施設を加へざるを遺憾とす。故に政府は速やかに東京帝国大学農学部実科を同所に於て分離し、之を独立したる専門学校に改定せられむことを望む。右建議す」というものであった¹⁶⁾。なお、この建議案は、1月29日、帝農にて、飯岡清雄、渡辺保治、藤巻雪生が会合し、作成したものであったことが、岡田の「日記」から判明する。

そして、交友会は実科独立運動を各方面に働きかけた。2月3日午後5時より交友会役員会があり、有馬秀雄代議士も出席し、今後の対策を協議した。9日には貴族院への運動として、温は西大路交友会会頭らと貴族院議員岡田良平

14) 駒場交友会『前掲書』238頁。文中、「二月十七ー八日の候（日時を逸す）」は一月二七、二八日の間違いであろう。

15) 駒場交友会『前掲書』193頁。

16) 駒場交友会『前掲書』194頁。『大日本帝国議会誌』第14巻、911頁。

宅を訪問し、要請した。「西大路、飯岡、近藤、自分ノ四人ニテ小石川原町ノ岡田良平氏ヲ訪問シ、実科独立ノ配慮依頼ヲナス…。氏ハ十一分ニ実科問題ヲ了解シ、種々ノ意見ヲ述ヘラル、…。右ノ結果極力研究会ニ運動スル方針ヲ定メ、明日石原助熊氏ヲ説キ、黒田、大久保両氏説伏ノ計画ヲ決シテ別ル…」とある。また12日にも交友会幹事会を開き、貴族院研究会、衆議院、文部省への運動を協議し、20日、温は貴族院の研究会役員会を訪れ、実科独立問題を陳情した。「午后四時研究会ニ(矢部、近藤、飯岡、渡部、渡部(林)、今一人)出頭。西小路、黒川両氏ノ紹介ニテ研究会役員(十余名)ニ実科問題ノ陳情ヲナス。自分総代トシテ具申ス。右ニ対シ、所謂聞き置クノ挨拶アリシ丈ニテ、サシタル手コタヘナシ」。また、22日には、温は飯岡清雄、近藤正一とともに貴族院議員の蜂須賀正韶公爵邸を訪問し、実科問題について陳情し、また、衆議院に河上哲太代議士を訪問し、実科独立の請願書を依頼等している。

3月6日午前、温は貴族院に出頭し、西大路子爵に石原治良外306名提出の「東京帝国大学農学部実科独立に関する件」の請願書の提出方を委託した¹⁷⁾。また、この6日、衆議院の本会議で、有馬秀雄外3名の「東京帝国大学農学部実科に関する建議案」が付議され、有馬代議士が提案説明を行った¹⁸⁾。なお、温はこの日衆議院の傍聴はしていない。この建議案は委員会に付託され、9名の委員の下で審議されることになった。委員長は今泉嘉一郎であった。7日、温は販売斡旋所にて建議案の委員会委員の訪問の打ち合わせをし、8日に温は衆議院に建議案委員の1人内藤浜治に面会し、依頼した。10日、建議案の委員ら(今泉委員長ら)が駒場農学部実科を実地視察することになり、温、藤巻、飯岡らが同行した。大学側は原教授が対応した。14日夜、温は原先生を訪問し、実科問題について談じた。原先生は「機嫌良シ」であった。

そして、実科独立建議案が、3月24日本会議に上程され、今泉委員長が報告し、満場一致で可決された¹⁹⁾

17) 『大日本帝国議会誌』第14巻、424頁。

18) 同、911頁。

19) 駒場交友会『前掲書』236頁。『大日本帝国議会誌』第14巻、1189頁。

第46議会閉会後も駒場交友会は実科独立運動を続けた。温も多忙の中、講農会長として、また、交友会幹部として運動に取り組んだ。4月20日夜、温は講農会長として販売幹旋所にて講農会幹事会を開催し、12年度予算を決め、5月21日には帝国農会にて講農会総会を開いた。この総会には在學生100余名と卒業生40～50名の多数が出席し、那須皓帝大教授が講演し、また、母校問題の協議、幹事の半数改選、会計報告を行い、また新入生歓迎式を行った。5月25日、温は丸毛信勝とともに文部省を訪問し、松浦鎮太郎専門学務局長及び赤司鷹一郎次官に面会し、実科独立問題に希望を述べた。6月7日にも、温は原、中村、藤巻、飯岡、丸毛とともに、母校問題につき高橋政友会総裁及び床次竹二郎を訪問し、従来の挨拶と将来の希望を陳述した。同月16日、温は古在由直東京帝国大学総長を小石川町駕籠町に訪問し、母校問題につき談じた。18日、温は丸毛とともに文部省を訪問し、実科問題につき赤司次官、栗屋実業学務局長に面会し、意見を述べた。21日、温は原、中村、矢部、藤巻、丸毛氏を帝農に招き、母校の寄付問題、飯岡問題等を協議している。22日午後6時より販売幹旋処にて交友会幹事会を開催し、19名が出席し、温が座長となり、交友会総会を開催すること（7月1日）及び事業報告、予算（理事会）を決定した。また、母校問題に関する報告、寄付金募集方針をきめ、飯岡問題を処理した（内容不明）。

7月1日、駒場交友会総会を開催し、一事業報告、二役員改選、三会計報告、四寄付金募集等を議した。10日、温は藤巻、渡辺俣治とともに、駒場の原先生を訪問し、母校問題寄付金の件を報告及び相談を行った。12日も原、藤巻、丸毛、中村らと母校問題について打ち合わせをした。

以上の運動の結果、大学当局及び文部当局を動かし、8月下旬、文部省は150万円をもって実科独立予算を計上し、大蔵省に回付した。大いなる成果であった。ところが、この成果を一挙に崩したのが、9月1日に発生した関東大震災であった。震災の結果、諸官庁のほとんどが焼失し、また、本郷の帝国大学も大被害をこうむった。そこで、実科独立化の予算は撤回され、ふりだしに

戻ったのだった。大学当局は大学復旧に当たって、総合大学の実を挙げるという理由から、農学部の本郷移転を決定し、12月の第47臨時議会(12月11日～23日)にその予算を出したが、実科独立の予算は計上されなかった²⁰⁾

12月3日は交友会幹事会を開催し、母校問題について打ち合わせを行い、温は古在帝大総長を訪問することを引き受けた。そして、15日に温は古在総長を訪問し、実科問題を協議した。この日の「日記」に「実科問題ノ意見ヲ叩ク…。目下実行不可能…。已ムヲ得スンハ本郷ニ伴ヒ移転シテ時期ヲ待ツト…。十分ニ要ヲ得サリシモ意ノアル処ヲ察セラル。人アリ辞シテ帰ル」とある。又、この夜、交友会の幹事会に出席し、母校問題の経過報告を行った。

第3節 家族のことなど

家族関係では、長女の末光清香(明治28年3月21日生まれ、27歳)は、嫁ぎ先の末光家との間で少シトラブルがあった。温は4月28日帰郷し、30日に南吉井村大字南野田の末光家を訪問した。「午后一時立花発ニテ末光訪問…。清香一件ニ付、近親協議ノタメ…。八木忠衛君ト意見ノ交換ヲナシ、更ニ、来月四、五、六日ヲ期シ、清香ノ意見ヲ確メ、更ニ、相談スルコト、シ、薄暮、越智太郎君ト帰宅ス」とある。5月5日に、牛渕の八木もりえ(故順一郎の妹、八木忠衛へ嫁いでいた)と清香の一身上につき意見の交換をし、また、夜は岩子、橘シカ列席にて相談している。「要スルニ、末光、牛渕等ト意見ノ疎通ヲ欠キシコトニテ他ニサシタルコトナシ」とのことであった。そして、翌6日に清香、もりえ、温の3人でよく話しあい、解決している。「八木もりよと清香ト三人ニテ清香及末光ノ件ニ付熟談ヲナス。三人ニテ談シ、大ニ了解ヲ得タリ」。

次女の禎子(明治35年2月2日生まれ、21歳)は、本年3月23日、東京女子大を卒業した。そして、東京帝国大学心理学科の聴講生となり、心理学を学ぶかたわら、岡本綺堂に師事し、戯曲を書き始める。結婚したくないという

20) 駒場交友会『前掲書』240～242頁。343～344頁。

ことも東京帝大の聴講生になった理由のひとつである²¹⁾

4女の綾子（明治41年10月1日生まれ、14歳）は、愛媛県立松山高等学校に通っている。

長男の慎吾（大正元年8月23日生まれ、10歳）は、石井小学校に通っている。

温の妹のケイ（3女、明治18年1月23日生まれ、37歳）は飯田町に住んでいたが、12月6日に麴町区三番町二八番地に転宅した。

なお、親戚関係では、新宅の叔父岡田義朗が経済的苦境に陥っていた。義朗は米穀取引商で明治末から大正前期にかけて財を成したが、大正9年の戦後恐慌・米価暴落で相当な痛手を受け、苦しかったようだ。そのため、5月6日、岡田義朗より今在家田の買取の交渉があり、温は1,200円にて購入している。

また、柏儀一郎家も破綻したようだ。8月31日、温は柏儀一郎家の家計整理につき、土地売却して負債整理することとし、温と岡田英雄（分家の岡田家）が柏の土地を購入することにし、温が5反4畝3歩を、英雄が4反5畝8歩を引き受けている。

第4章 大正13年

大正13年（1924）、温53歳の年である。帝国農会の幹事を続けている。しかし、まだ、愛媛県農会技師を続けており、その仕事も残っており、極めて多忙であった。本年は大戦後の農業、農民、農村の危機に対し、引き続き、下からの農村振興運動（農家負担の軽減問題、米価維持、農務省独立化等）や農業経営調査等に取り組み、全国を講演に飛び廻った。

また、本年は第2次護憲運動の高揚期である。1月1日枢密院議長の清浦奎吾に組閣命令が出て、貴族院を背景に、7日清浦内閣が発足した。それに対し、10日、政友会、憲政会、革新倶楽部の3派有志が清浦特権内閣打倒の運

21) 「岡田禎子年譜」（愛媛県立南高等学校同窓会、代表大西貢『岡田禎子作品集』青英舎、1983年、554～555頁）より。

動を始めた。そして、1月31日衆議院が解散され、5月10日に第15回衆議院選挙がおこなわれ、護憲3派勢力が勝利する。この選挙にさいし、農民の代表を議会に送り出す運動がとりくまれ、温に郷里から立候補の要請があり、種々の経過を経て、温が立候補し、当選する。衆議院議員・岡田温の誕生である。日記に、選挙関係ならびに温の活動にかんし大変興味深い記事が見られる。

以下、帝国農会幹事として、また衆議院議員としての温の多面的な活動をみて見よう。

第1節 帝国農会幹事・衆議院議員活動関係

温は本年の正月、故郷の石井村で過ごした。1日から農業経営についての原稿を執筆し、2日は家例の欽初め、表忠会理事会に出席、3日は県農会の多田、加藤ら8人を自宅に招待、4日も原稿を執筆するなど(農村問題の体系)、正月も多忙である。

1月5日に県農会に出頭し、午後1時からの農政記者同志会の例会に出席した。早くも選挙関係の記事が出てくる。この会合で、温は、門田晋県農会長(門田は政友会の幹部でもある)から代議士立候補の要請を受けている。しかし、温はこのときはっきりと断っている。この日の日記に「県農会ニ出頭。午后一時ヨリ農政記者同志会ノ例会ヲ開キ出席ス…。別席ニテ門田君ヨリ代議士立候補ノ件ニ付相談アリ。明晰ニ拒絶ス」とある。また、この日の夜6時から道後すし丸で、伊予郡農友会(農学校出身の農村青年の団体、非政友会・非憲政会)の幹部と会合した。農村青年たちは、来る衆議院選挙に向けて、意気高揚していた。この日の「日記」に「昨年県議選挙以来ノ形勢及国・議ニ対スル意見聞ク。非常ノ意気込ナリ」と記している。伊予農友会は、昨年の第19回県会議員選挙で伊予郡(定員2)で、伊予郡農会長の宮内長(無所属・中立)を推挙し、政友会、憲政会と戦い、当選させているので²²⁾、次の衆議院選挙でも独自

22) 愛媛県議会史編さん委員会『愛媛県議会史』第3巻、昭和56年、918頁。

に候補を擁立する考えであった。農村青年のデモクラシーの雰囲気は何われる。なお、この日の温の「日記」には記述がないが、のち、温が『農政研究』に執筆した「立候補から当選まで」のなかで、農友会から衆議院候補の要請を受けたが、絶対に謝絶し、上京したとの記事がある²³⁾ 6日は石井村の篤農家懇談会、婦人講習会に出席し、7、8日は郡市農会役職員協議会に出席している。在松中は多忙である。

1月9日から温は帝農幹事の業務に戻り、この日午後2時半の高浜発の船にて大分に出張し、翌10日、11日の2日間、県会議事堂にて大分県農会主催の郡市農会役職員に対する農会経営講習会に出席し、講話を行った。12日は役職員協議会があり、出席し、終わって、午後6時20分大分発にて、上京の途につき、14日午前9時20分に東京駅に着した。そのまま帝農に出勤した。

1月16、17日の両日、温は帝国農政協会（昨年6月設立、帝国農会の別働隊）の協議会を開き、そこで、①1月24日に帝国農政協会総会を開催 ②農務省の独立 ③農家の負担軽減、地担委譲遂行、教育費増加 ④米穀法の改正 ⑤自作農創設、基金の制定 ⑥小作法の制定、を決めた。

さて、清浦貴族院内閣の登場に対し、中央政界は緊迫している。1月10日、政友、憲政、革新倶楽部の有志が清浦特権内閣反対の運動を起し、15日には、政友会総裁高橋是清が同会幹部会で清浦内閣反対を表明した。そこで、16日政友会の幹部のうち、山本達雄、中橋徳五郎、床次竹二郎、元田肇らが脱党し、政友会が分裂した（のち、29日脱党組は政友本党を結成）。政友会の分裂は帝国農会の農政運動にとって支障であった。17日の温の「日記」に「政友会の分裂。主領株の山本、床次、元田、中橋ノ四氏脱会。右ニテ農会運動ニ支障を生ズ」とある。

1月18日に、温は政友会所属代議士の帝農評議員会を開催し、東武、西村

23) 岡田温「立候補から当選まで」（『農政研究』大正十三年七月、岡田温選集第三巻『農業時論』所収）。

正則、松浦五兵衛、三輪市太郎、秋本喜七らの政友会代議士が出席したが、その代議士連を前に大木遠吉帝農会長(貴族院の伯爵同士の会会長)が挨拶したが、温は「大木会長ヨリ清浦内閣成立の事情、経過及帝国農会等ニ関シ、巧妙ナル辞令ノ挨拶」と評している。大木は清浦内閣支持派で、政友会が分裂し、政友本党が創立されるや、政友本党と政友会の提携に奔走したようだ²⁴⁾

また、1月19日、帝国農会幹事の山崎延吉が辞任した。これは、かねてより、矢作副会長とうまくいっていなかったためであった。そして、その後任に、増田昇一と高島一郎両参事が幹事に昇格した。これにより、帝農の幹事は、岡田、福田、増田、高島の4幹事体制となった。

1月21、22日は農業経営審査会を開会。横井時敬が座長となり、大、中、小経営及び共同経営を調査項目に決めた。24日午後1時より帝国農政協会の総会が鉄道協会で行われ、宣言、決議を行い、翌25日には決議事項の実行協議会を開いている。そこでは外米関税復旧問題と選挙問題が多く議論されていた。政府は、関東大震災のため、大正12年9月から臨時的に輸入関税を免除していたが、それを13年2月引き続き、免除を決めようとしていたためであった。帝農にとっては、米価維持の立場から忌々しきことであり、温は28日から31日にかけて、温は外米輸入税免除問題を検討し、輸入税免除の延期反対の要項を草している。

1月31日の衆議院において、列車転覆事件に関する浜田国松議員の緊急質問中、暴漢3人が衆議院に乱入し、議場を占拠し、大混乱を来たし、衆議院が解散となった。「暴漢衆議院議員席ニ乱入シ、小松鉄相ノ草稿ヲ奪ヒ去リ、大混乱ヲ来シ…逐ニ解散トナル」。かくして、総選挙が行われることになった。

2月、温は帝国農会の業務(農業経営調査、等)の外、外米関税問題や総選挙対策で多忙であった。1日、温は帝国農政協会実行委員会を招集し、翌2日実行委員とともに前田農相大臣を訪問し、外米輸入関税免除反対を要請し、そ

24)『帝国農会史稿 記述編』229頁。

のあと政友本党を訪問し、「談判」している。しかし、農商務省当局は外米関税撤廃を続ける意向であった。「本日各局長、農相官邸ニ会議ヲ開キ、関税延期ノ決定ヲ論ジツツアリト」。そこで、この日の夕刻、帝国農政協会の実行委員会を開き、来るべき総選挙対策を議論し、2月中に各府県を巡視して政況調査をし、総選挙対策を決めることにした。5日に温は福田幹事と協議し、政況視察員の選定をした。温、福田、増田幹事の外に、大島、田倉、赤石、磯野、松山、坪井、管野、森部を選んだ。温は、四国地方を視察することにした。

2月12日、清浦内閣は外米関税免除を6月30日まで延期することをついに決定した。帝農で矢作副会長出席のもと、幹事会を開き、対策を議論したが、良案はなかった。12日の「日記」に「呼」「良法ナシ」と記している。16日、温は政況視察員の打ち合わせ会を開き、この日委員たちが政友本党の滝正雄代議士を訪れ、また、17日には山本達雄代議士を訪れ、外米関税問題を質している。20日、温は農政研究の原稿「政見によって向背を決せよ」を執筆している。

2月21日、温は三重県での農業経営講習会での講義、ならびに四国地方の政況視察のために、出張の途についた。この日夜8時15分発にて出発し、翌22日津に着し、23日から25日にかけて、県農会にて、農業経営について講義を行った。25日終わって、温は政況視察のために高知に向かい、翌26日午前7時半高知に着した。午後高知県農会に行き、協議をしたが、高知は政友会、政友本党の両党争奪激しかった。この日の「日記」に「昨今高知ハ一昨日支部総会以来、両党争奪ニ夢中トナレル時ナリシヲ以テ、一般ノ有志ニ農業問題ナト耳ニ入ラス。故ニ米穀法ノ改正ト農家負担軽減ノ下ニ義務教育費中教員給国庫支弁延長反対ヲ対選挙要項トシテ候補者ニ約束スルコトニシテ散会シ、得月樓ニテ晚餐ヲナシテ散ス」とある。27日朝7時半、温は高知を出て、徳島に向かった。大歩危、小歩危を通り、池田を経て、5時半徳島についた。28日に徳島県農会にて、帝国農政協会の役員会に出席した。しかし、徳島の農政協会は政友本党系であり、その活動に対し、温が「注文」をしている。29日朝

6時40分、温は徳島を出て、高松に向かい、11時に高松市に着き、香川県農会で政況を聞き、やはり、帝農協会の活動に対し、「注文」を行った。終わって夜9時発の義州丸にて、温は松山に向かった。3月1日午前7時半に高浜に着した。

3月1日、温は愛媛県農会に行き、門田晋農会長から県下の政況を聞いた。このとき、門田から温に立候補の要請があり、また、夜5時から梅ノ舎で、門田晋、宮脇茲夫、宮内長、重見番五郎、石井信光、日野政太郎らからも要請があった。温への地元からの本格的要請の最初であった。この日の日記に「県農会ニ行ク。門田晋君ヨリ県下ノ政況ヲ開キ、且ツ自分立候補問題ニツキ懇談アリ。…五時ヨリ、梅之舎ニテ門田、宮脇、宮内、重見、石井、日野松〔政〕太郎君、諸君ト食事ヲナス。但シ、自分ハ葛湯ヲ呑ミタルノミ。七時過帰宅シ、下剤ヲ用ユ。石井信光君共ニ帰り、立候補ノ問題ニツキ意見ヲ交換ス」とある。なお、宮脇茲夫は温泉郡農会長で前荏原村長、宮内長は伊予農友会推薦の県議で前南伊予村長・伊予郡農会長、重見番五郎は元愛媛県農会長・前立岩村長、石井信光は石井村会議員、日野政太郎は政友会の県議で湯山村長・村農会長で、いずれも、温泉郡・伊予郡の農会関係の実力者である。翌2日、温は石井村会議員で農政協会会長の重松亀代からの要請があり、石井小学校にて、村会議員その他の有志50余名と会合し、やはり立候補の要請をうけた。このとき温は「立候補未決心」の旨を伝えている。しかし、その後、道後すし丸で、伊予郡及び温泉郡の有志と会合し、また要請をうけ、立候補の止むを得ざる状況となっている。この日の「日記」に「午后三時ヨリ腕車ニテ石井校ニ行キ、村会議員其他有志五十余名ニ対シ立候補未決心ノ旨ヲ伝へ、其ヨリ道後すし丸ニ行キ、伊予郡及温泉郡ノ有志七、八名ト会合ス。右ニテ立候補ノ止ムヲ得サルニ至ルヘキ形勢トナレリ…」とある。さらに、午後11時、温が帰宅したが、そのとき、門田晋が温宅を訪れ、須之内品吉（須之内は、清浦内閣の蔵相勝田主計が推挙。無所属中立だが、政友会が推薦）が断念したので、温に立候補せよと再度勧誘した。だが、温は門田に「体良ク挨拶」をなしている。この日の

「日記」に「門田晋君来訪…。須之内断念ニ付、立候補勧誘ノ相談アリ。体良ク挨拶ヲナス」とある。すなわち、温は政友会からの立候補を嫌っていたことが伺われる。

立候補の決意を固めた温は、3日、県農会にて温泉郡農会長の宮脇茲雄に会い、立候補について経費と有志団体の援助を要請した。4日にも県農会に行き、宮脇茲夫、門田晋に対し、各政党所属の有志の団体からの推薦を求めた。しかし、容れられなかった。夜、従兄弟の越智太郎（前石井村会議員、明治44年1月～大正11年1月）を招き、立候補の可否を相談したが、太郎からは立候補を勧められている。5日、温は浮穴村長の武智太市郎を訪ねて、立候補の事を相談したが、武智も温に立候補を勧めた。その後、温は温泉郡役所に行き、温泉郡農会長の宮脇茲夫に立候補の決心の旨を告げ、また、県農会に行き、門田晋にも同様の旨を告げたが、門田は温が政友会の援助を受けないと言明したため、多少悪感情を持っている様子であった。この日の「日記」に、「県農会ニ行き、門田氏ニモ同様ノ相談ヲナス。要スルニ、昨日ノ会見ニ於テノ自分ノ政友会ノ援助ヲ受ケサルベク言明セルタメ、多少悪感情ヲ持ち、計画ヲ変更セシナラン。右ニテ、大体、両君トノ関係薄クナル」とある。また、一度辞退していた須之内が無所属中立だが、政友会の推薦で再び立候補することになり、温は「稍失望」し、「立候補問題愈々複雑トナル」と記している。

3月6日、温は県農会に行き、再度門田晋、宮脇茲雄と会見した。門田・宮脇は、温に須之内との妥協を求めている。この日の日記に「三番町金子ニテ門田、宮脇両君ニ会シ、須之内擁立ト妥協ノ相談ヲ受ク。岡本馬太郎君同席…。自分ニ不利益トハ承知シナガラ両君トノ関係ヲ考慮シ、陽ニ受諾ス」とある。そして、この日、温は県知事を訪問し、立候補の経過を話し、暗に了解を求め、そして、午後5時より石井村役場にて有志50余の会合において、温は立候補を言明し、有志に対し、決心を促した。この日の「日記」に「県知事ヲ訪問シ、立候補ノ経過ヲ話シ、暗ニ了解ヲ求ム。…午后五時ヨリ、石井役場ニテ有志五十余ノ会合アリ。立候補ヲ言明シ、決心ヲ促ス」とある。

その結果、愛媛第2区（温泉郡・伊予郡，定員2）では，政友本党が現職の成田栄信を，憲政会が松山高等商業学校教授の渡部善次郎を，政友会が無所属・中立の須之内品吉を擁立，そして，無所属・中立から岡田がでて，4人で2議席を争うことになった。

温は帝国農会の幹事である。したがって，立候補に当たっては帝国農会の了解を得なければならない。3月7日，温は上京の途についた。船中にて，14名の友人へ立候補の予告の文章を書いている。翌8日12時半東京に着した。9日早朝，温は福田幹事を訪れ，郷里における立候補の状況を説明した。また，温は矢作副会長宅を訪れ，説明した。だが，先生は温の立候補を危ぶむ態度であった。「先生ハ頗ル危フミタリ」。

3月10日，温は帝国農政協会の政況視察委員会を開き，各地の視察状況を報告し，総選挙対策について，次の決議をした。「一，講演ノ希望ニ応シ出演ス。二，宣伝ビラヲ配布。各府県ニテ帝国農政協会ノ名ヲ用ユルノ認メ，及直接ニ，三十万ノ警告ノビラヲ発ス。三，帝国農政協会幹部ノ推薦状ハ十分ニ詮衡シ考慮ス。四，特殊ノ候補者ノ応援モ，三項同様注意ノ上行フ。五，四月中ニ農政協会理事会開催ハ考究ヲ要ス」。

3月11日，福田幹事が大木会長に温の立候補問題につき交渉をしたが，「或条件付ニテ或提供ヲナスヘシトノ回答」を得ている。内容，意味不明だが，温の立候補が難しくなったようだ。12日，温は福田幹事と相談し立候補の辞退を決めた。13日，温は大木会長の招きにより，大木邸を訪問したが，大木会長は温に立候補辞退を勧告した。それは，温の立候補が「(政友)本党及政府ノ大頭痛ナル状況」とのことであった。そこで，温は立候補断念を決めた。この日の「日記」に「大木会長ノ招ニヨリ同邸ヲ訪問ス。病氣臥床中ニテ面会ス…。立候補〔辞退〕ノ勧告ヲ受ク。自分ノ立候補ハ本党及政府ノ大頭痛ナル状況ナルヲ以テ，少時考慮ノ結果，断念ノ旨ヲ答ヘテ辞ス」とある。また，「日記」の欄外に「大木伯ノ勧告ニヨリ立候補ヲ断念ス」と記している。そして，温は，郷里の門田晋，宮脇茲夫，石井信光，大原利一，重松亀代，堀内浅五郎，

宮内長、隅田源三郎らに立候補断念の電報及び手紙を出した。また、郷里への説伏は福田幹事に依頼した。

3月14日、温は長野・富山・熊本での講演のために出張した。15日午後2時より上田公会堂にて、長野県農事協会連合会主催の講演会にて、700～800名を前に講演した。終わって、夜1時40分発にて富山に向かい、16日朝6時50分富山に着した。北陸一帯は大雪であった。午後、富山県中新川郡五百石町にて講演を行い、翌17日朝9時富山を出て、氷見郡上庄村に行き、同村小学校にて2時間ばかり講演した。終わって、神戸に向かった。18日午前6時40分に神戸に下車。そこに、かねて連絡し、郷里からやってきた松田石松（石井村助役、石井村会議員、大字東石井）、大原利一（石井村会議員、大字星岡）、野村茂三郎にあい、立候補辞退について協議したが、立候補するよう談判されている。しかし、温は福田幹事と相談しなければ、立候補の決心ができない旨回答した。温は尾道で大原らと別れ、熊本に向かい、19日午前3時30分に熊本に着した。就眠、休憩のあと、会場の坪井研究所に行き、町村農会長会に出席し、午後農村振興の意義について講話した。この日、郷里の工藤養二郎、日野松太郎から是非立候補してほしいと長電を受け取っている。温と別れた村議の大原利一は東京に行き、福田幹事に会い、説得した。そして、その大原から温は次のような電報を受け取った。「フクダシニオウタ。キミノケツイアレバ、テイコクノウカイノハウハスベテヒキウケル。ケツイセヨ」。この電文を見て、温はついに再び立候補することを決意した。そして、即座に郷里の東村縫次郎、西村央、三津山保太郎、仙波茂三郎、大原利一、松田石松、野中親三郎、渡辺莊一郎、野村茂、戒能新平、森重善、本多儀一等に立候補の電報を打った。

しかし、3月20日の午前8時に福田幹事から温に次のような電報が来た。「最後迄説得ニ努メタリ。年配ノ人ニハ或程度ノ了解ヲ得タルモ、青年者ハ益崛起セントス。出来得ルカギリジセ。已ナクモ冷静ニ形勢ヲ見ヨ。君ノ返如何ニ関セズ運動ハ継続ス。友人トシテ僕ハ飽迄反対ヲノベ置キタリ」。この福田の電報と19日の大原の電報とは正反対で、福田美知は基本的に温の立候補に

反対で、自制を促していた。

だが、温は「脳中が混乱」したが、最終的には立候補を決意した。温「立候補から当選まで」のなかで、「二十日の朝福田君より談判不調の電報が到着した。それと前後して各方面ヨリ四、五十通の電報を受取った。其内には選挙区以外の友人の強制的勧誘などもあった。ここに於て再び脳中が混乱し、千思万考の結果、今日迄考への基礎とした一身の保全策を棄てて、已む得ずんば郷党の青年の希望に殉ぜんと内心略決意した」と述べている²⁵⁾

温は、3月20、21、22日の3日間、熊本県会議事堂にて、県農会主催の農会経営講習会で町村農会の役員及び技術者に対し講演を行い、その間、郷里に立候補に関する手紙、電報等を打った(武智雅一、武智逸郎、岡井三郎、岡井亀三郎、岡井浜次郎、宮脇茲雄、門田晋、大原利一郎、白石大蔵、等々)。23日に、温は熊本を出て、上益城郡御船町に行き、同郡役所にて現下の農政と議員選挙と題して講演し、終わって、帰郷の途に着き、小倉、門司をへて、25日朝7時高浜に着した。高浜港には大原利一、松田石松、重松亀代、石井信光らの石井村会議員や越智太郎らが待っていた。そして、一同と松山市の久保田旅館に行き、伊予、温泉郡の青年有志と会談し、立候補を決した。青年たちは「殺気」だっていた。この日の日記に「久保田旅館ノ大評議…伊、温ノ青年有志ト会談ス。当日ハ起否ヲ決スル日ナルヲ以テ青年ノ一部ハ殺気立テリ。仙波茂三郎君参加シ、選挙長ヲ引受ルニ至リ、起立ト決ス。午十一時過トナル。当日ハ自分ノ生涯ノ一運命ヲ決スル日ナリシ」とある。仙波茂三郎は川上村の村会議員で、温泉郡農会副会長である²⁶⁾

25) 『農政研究』大正十三年七月(岡田温選集第三卷『農業時論』所収)。

26) 仙波茂三郎は明治15年川上村南方の豪商・佐伯文四郎の次男に生まれ、28年に母親の里、松瀬川の仙波茂三郎家(同村村長等も歴任)の養子に入り、松山中学、早稲田大学を卒業し、42年に家督を相続。大正3年に同村の松木喜一と共同で則之内に発電所をもうけ、9年には川上水力発電所に発展させた。川上村に電燈をともしたのは、茂三郎の手腕によるところが大きい。又、温泉郡米券倉庫を創設し、其経営にあたり、米を関西に輸出した。さらに、県下に先駆けて、戸主会、婦人会をつくり、小作保護にも努めた。大正15年～昭和5年には川上村の村会議員も務めた(『川内町史』『川内町新誌』)。

3月26日は、伊予三島に行き、宇摩郡農会の主催の小作米品評会にて、講演を行い、また賞品授与式に出席した。翌日、松山に帰った。

3月28日朝7時、温は石井村有志40～50名と椿神社に参詣し、選挙の必勝を祈禱し、以降、本格的な選挙活動体制に入った。この日、県庁を訪問し、また、梅ノ舎での農政協会各郡幹事会に出席し、さらに、余土村長の鶴本房五郎を訪問した。29日には坂本、荏原村の有志宅数十名を訪問した。30日は川上村の仙波茂三郎を訪れ、選挙の全権を委託し、その後、砥部村、荏原村を訪問。その夜6時から森松座で政見発表演説会を開いた。700名余りが集まった。この日の「日記」に「六時ヨリ森松座ニテ政見発表ノ演説会ヲ開ク…。生レテ初テノ仕事ナリ。応援弁士ハ野口、武智、宮内、野村諸君。来会者七百余名、静粛」とある。31日は伊予郡に行き、南伊予村の有志と懇談し、夜6時から郡中にて政見発表演説会を開いた。1,200名ほどが集まり、野口、武智、大西、宮内一乗、重松亀代、野村茂三郎らが応援弁士を務めた。

4月1日、温は富永、野村らと郡中町、上灘村、下灘村、岡田村に行き、村の青年有志と懇談した。また、この日、北宇和郡から赤穂清喜が松山に来て、第7区から出ている政友本党の太宰孫九の応援を懇請されたが、不可能と答えている。2、3日の日記は記されておらず、活動は不明。4日は宮内長、渡部とともに、南、北山崎村、郡中村、松前村、北伊予村を訪問。5日は梅村新吉、今村らと温泉郡北部の河野村、北条町、立岩村、難波村、正岡村等を訪問し、有志青年たちと懇談した。この日、温は腹心の村議・大原利一を第3区（今治市、越智郡、周桑郡）から出ている政友会代議士河上哲太のもとに派遣し、会見させている。内容は不明であるが、のちの記事から勝田蔵相の支持を求めたものと推測される。

4月6日、温は帝農幹部に了解を得べく、上京の途についた。この日朝9時に石井駅を出て、翌7日正午東京に着した。直ちに、帝国農会に出勤し、福田美知幹事と協議。夜、温は矢作副会長を訪問し、立候補の釈明をした。翌8日には勝田蔵相を訪問したが、病気のため面会しえず、そのあと、大木帝農会長

を訪問して立候補の弁明をした。この日の夜、矢作副会長が温宅に来て、東京帝大農学部の原熙先生が温が立候補することに反対との意見を伝えに来た。9日には、勝田主計蔵相を再度訪問し、河上哲太の手紙をわたし、立候補にいたった状況を説明している。勝田は「希望ノ主旨ニハ賛同シ、暫時考慮セン」との態度であった。10日、温は駒場に原先生を訪問したが、先生から立候補についての忠告を受けた。しかし、温は「当ラズ」と記している。

4月10日、温は再び郷里で選挙活動を行うべく、夜7時5分東京発にて帰郷の途に着いた。車船中にて、「私ノ主張ト立場」を17枚の原稿に執筆している。11日夜9時松山に着し、道後ホテルに宿した。

4月12日以降、温は精力的に演説会を開いた。12日は仙波八三郎（久米村の梨栽培の先駆者）の案内で久米村を訪問し、その夜7時より、公会堂にて政策発表演説会を行った。300～400名ほど集まり、野村、隅田、野口らが応援弁士となった。9時過ぎに横井時敬先生一行が応援に来て、横井先生ならびに第3区から出る無所属の渡辺鬼子松が応援演説を行い、「大盛況」であった。13日は、横井先生一行と北条町及び味生村で演説会に臨んだ。北条町では700～800名、味生では200余名集まり、やはり「非常ノ盛況」であった。14日は伊予郡農友会の一行とともに広田村に行き、総津劇場にて演説会を行った。50～60人ほど集まり、演説会終了後20余名の青年が温の宿に来て、運動の打ち合わせをした。熱心なる青年多く、「有望」と温は述べている。15日には中山村に行き、同劇場にて演説会を開いた。120～130名ほどが集まった。

4月15日、先の県議員選挙で結成された立憲青年党（温泉郡青年団有志が中心となり大正13年2月17日結成）が分裂した。それは、立憲青年党の幹部が党員の意思を無視して、政友本党の成田栄信（第2区から立候補）と結託したとして、批判し、別に立憲農村青年党を組織し、農村に理解のある岡田温を推薦することにした²⁷⁾ 15日の日記に「立憲青年党崩壊し、多く脱退シ、幹

27) 愛媛県議会史編さん委員会『愛媛県議会史』第3巻、昭和56年、929頁。

部十二名久保田ニ来タリ、吾々ノ帰リヲ待ツ。別ニ立憲農村青年党ヲ組織シ、同志ノ運動ヲ援助セントノ交渉アリ。大体快諾ス」とある。

4月16日以降も、温は精力的に演説会を行った。16日は余土村と垣生村で、17日は朝美村で、18日は下灘村で宿の前の明屋敷でテントを張り70~80名に対し、また、上灘村では芝居小屋にて約100名に対し演説した。19日は小野村平井劇場で演説し、「大盛況」であり、20日は三内村安国寺で来会者は30余名と少なかったが、「非常ニ熱心ニテ精神成功」であり、その夜は川上村名越座で140~150名に対し演説、21日は北伊予村で演説し、22日は立岩村公会堂にて100余名に対し演説、夜は立憲青年党の地盤の強い浅海村に乗り込み演説したが、野次が多かった。23日は潮見村吉藤盟重寺で70~80名に対し演説し、あと、久枝村安城寺で80~90名に対し演説、24日は興居嶋村大字由良に行き、田村昌八郎の案内で、青年会堂で70~80名に対し演説し、「当地トシテハ大ナル盛況」であった。25日は浮穴村大字南高井集会場と岡田村大字上高柳と北川原の補修学校にて双方とも120~130名に対し演説し、「盛況」であり、26日は素鷲村大字小坂と桑原村大字正円寺の公会堂にて演説、27日は荏原村大字東方大蓮寺で有権者殆ど全部が出席し、「盛況」であり、あと南伊予村の寺に行き、200余名に対し演説し、「盛況」、28日は拝志村上村伝宗寺にて、120~130名に対し演説、29日は北吉井村大字横河原の芝居小屋と大字志津川の青年会堂に行き、演説した。当地は政友本党の本拠地であるが、「漸次動揺」しており、温の演説は「良好」であった。30日は生石村大字南吉田と雄群村大字土橋で演説、5月1日は興居嶋村大字泊に再度行き、泊にて60名に対し演説。2日は東中嶋村に行き、大字大浦では個別訪問をし、会議所にて70~80名に対し演説し、「多大ノ好感ヲ与」えた。あと、大字神浦でも演説し、「青年会共鳴、賛同」した。3日は西中嶋村大字吉敷に行き、70、80名に対し演説し、「好感ヲ与」えた。あと、大字宇和間に行き、120、130名に対し、演説し、「頗ル盛況」であった。4日は坂本村円福寺にて、140、150名に対し、演説し、「盛況」であり、あと、一人の運動員も居ない堀江村に行き同劇場に

て演説した。心細さを感じたが、60、70名が来会し、「演説ハ相当効果」があった。さらに粟井村に行き、教会にて演説した。粟井でも「予想外ノ好結果」であった。「粟井ハ教会ニテ開ク。人来ラサルカ、弥〔野〕次充滿セルカト予期シタルニ、満堂充員、静肅ニテ且ツ講聴ス。本日兩処ハ予想外ノ好結果ナリシ」。5日は難波村の会議所にて、50、60名に対し演説し、次に河野村大字柳原の劇場にて、500余名に対し、演説し、さらに正岡村の会議所にて100余名に対し演説した。6日は砥部村の劇場にて、300~400名に対し演説した。7日は伊予郡佐礼谷村に行き、村長以下40~50名に対し、演説し、午後7時から郡中町郡中座にて演説し、「立錐ノ余地ナキ盛況」であり、また、松前村劇場にて500、600名に対し演説した。8日は三内村大字則之内の富久繁一宅で、40、50名に対し、演説し、次に川ノ内金比羅寺で170、180名に対し、演説したが、「空前ノ盛況」であった。あと、湯山村に行き、高茂宅にて40、50名に対し演説した。なお、この日、石井村の男子総出動している。9日が投票の前日である。この日の「日記」に「最後ノ督励。午前十一時頃ヨリ八木定君(後ハ、真木重作君)ト兩郡ノ事務所を訪問シ、状況ヲ窺ヒ督励ヲ加フ…。石井村総出動。各村ニ石井村ノ運動委員入り込ム」とある。そして、伊予郡農友会が温の得票数を、温泉郡は2,187票、伊予郡は1,263票、計3,450票と予想した。なお、この選挙期間中、温の応援弁士は、野口文夫、宮内長、野村茂三郎、大西広人、重松亀代、隅田源三郎、富永、梅村新吉、今村菊一、石丸富太郎、多田隆、白石大蔵等々。中央からは、横井時敬(4月12日~13日)、古瀬伝蔵(4月22日~27日)、内藤友明(4月13日~)、麦生富郎(4月25日~28日)、大島国三郎(4月30日~)、片山熊太郎(5月3日~)、山崎延吉(5月4日~)らが応援に来た。

5月10日が第15回衆議院選挙の投票日。11日が開票日である。第2区(定員2、温泉郡、伊予郡)の開票結果は、成田栄信(政友本党)が3,237票、岡田(無所属、中立)が3,065票で当選し、須之内品吉(無所属、中立、政友会が推薦)が2,955票、渡部善次郎(憲政会)が2,906票で落選した。温の得票

は予想より少なく、且つ次点、次々点との票差から極めて激戦であったことがわかる。しかし、初当選であり、その喜びが日記にあふれている。「開票ノ日。十時発ニテ出松。事務所ニ行キ、刻々ノ開票数ヲ報スルヲ開ク。各村ノ運動員ツメカケ、十時ニテ喜憂転倒ス。午後三時半頃開票ヲ終ル。一時最高点ニテ当選ノ報アリ。歓声堂ニ溢ル。一台ノ自働車ハ之ヲ村ニ伝フ。然ルニ二百ノ読違ヒアリ。成田最高点トナリ、吾ハ次点。左ノ如シ。午後十一時過頃、石井村事務処ニ帰り挨拶ヲナス。殆ト提灯行列ニ行キテ不在、宅ニ帰レハ国旗ヲ上ケ、寄贈ノ大提灯ヲ点シ、祝客ヲ待ツ。午後二時十分荏原村ノ自働車隊ノ提灯行列来リ、之レヲ最終トス。各村大歓喜」。

なお、愛媛県下の選挙結果は、1区(定員1)は杉宜陳(無所属、準政友)、2区(定員2)は成田栄信(政友本党)、岡田温(無所属)、3区(定員2)は、河上哲太(政友)、村上紋四郎(憲政)、4区(定員1)は小野寅吉(政友本党)、5区(定員1)は高山長幸(政友)、6区(定員1)は佐々木長治(政友)、7区(定員1)太宰孫九(政友本党)が当選し、政友3、政友本党3、憲政1、無所属2で、政友本党の健闘と憲政会の予想外の惨敗が特徴であった²⁸⁾しかし、全国的には、憲政会146(改選前、103、以下同)、政友本党112(149)、政友会101(129)、革新倶楽部30(43)、実業同志会8、無所属67で、政友会と革新倶楽部は多少減少したが、憲政会が43議席を増やし、第1党となり、護憲3派(憲政・政友・革新倶楽部)がさらに優勢となり、他方、清浦内閣与党の政友本党は37議席を失って、第2党となり、敗北した²⁹⁾

5月12日、初当選した温は、午前知事を表敬訪問した。しかし、成田栄信が先に来て座っていて、温は「面白カラス」と記している。その後、温は伊予郡と温泉郡の選挙事務所にお礼の挨拶に行き、また、13日は自動車にて荏原村、北条村、正岡村、立岩村、難波村、河野村、粟井村を訪問し、お礼、14日も石井村役場や選挙事務所、また、久松伯爵や警察署、県庁等に挨拶周りを

28) 『愛媛県議会史』第3巻、933頁。

29) 『議会制度百年史 院内会派編衆議院の部』296、297頁。

し、そしてその夜、亀乃井にて支持者（仙波茂三郎、石丸冨太郎、宮内長、大原利一、今村菊一、石井信光、大西広人、渡部好胤、野村茂三郎、梅村新吉、武智秀俊、等々）らと懇親会を催した。

5月15日、温は11時40分高浜発にて、堀内浅五郎石井村長や松田石松、大原利一、石井信光ら、多くの見送りをうけて、上京の途につき、翌16日12時東京に着した。東京駅には、帝農の職員一同が出迎えており、共に帝国農会に行き、一同に挨拶し、また、その夜、矢作栄蔵副会長宅を訪問し、当選の報告をしている。17日には、大木帝農会長、原先生、横井先生宅を訪問し、19日には、農商務省に報告、挨拶を行った。

5月21日、衆議院議員として、また、帝農幹事としての活動が始まった。この日、温は第一区選出の杉宜陳（無所属、準政友）と面会し、中立団組織について意見の交換をしている。また、この日、井上雅二議員（兵庫県選出、無所属）より中立議員の打ち合わせ会の案内が来た。22日、帝国ホテルに中立議員27名が集まり、交渉団体を組織することを決めた。この日の「日記」に「十一時半ヨリ帝国ホテルニテ中立議員二十七、八名会合シ、交渉団体組織ニツキ協議ス。若尾、長岡、井上其他ノ発起…。来ル三十一日再会ヲ約シ、中食ヲナシ、散会ス」とある。23日は帝農評議員会と府県農会役職員会への提出問題の起草。また、矢作副会長と米及び負担問題について協議。24日は祝辞の礼状400通を書き、25日は衆議院選挙の所感と弁明を執筆³⁰⁾。26日は帝農評議会を開催し、来る道府県農会役職員協議会に提案する決議を決めた。27日は群馬県前橋に行き、女子師範学校における県農会主催の講習会に出席し、県、郡、町村農会の技術者170、180名に対し11時より午後4時まで講義。28日も午前9時より午後2時半まで講義し、終わって、帰京した。

5月30日～31日、帝農は道府県農会役職員協議会開催した。そこで、「農業経営調査ニ関スル決議」「米生産費調査ニ関スル決議」「農会販売幹旋事業ニ

30)『講農会々報』第百三十三号、大正一三年七月に「総選挙所感の一片」を記している。

関スル決議」「農村振興議会对策ニ関スル決議（農務省の独立等）」「繭価崩落対策ニ関スル決議」「開墾助成法ヲ北海道ニ適用スル件」「帝国農会主催農村振興講習会ノ件」「震災農村救済ノ件」を決議した³¹⁾。その間の30日、中立議員の中正倶楽部発会式があり³²⁾、温も加盟した。また、31日の夜は、講農会による温と湛増庸一³³⁾の当選祝いが青山のいろはで催されている。

6月も温は衆議院議員として、また、帝農幹事として種々業務を行った。1日、郷里で温泉郡農友会が道後ホテルにて200余名が会合し、結成されており、温は電報を打っている。2日は挨拶礼状の執筆。3日は「実業の日本社」の原稿（「新内閣に対する注文」）の執筆、また、午後5時からは駒場交友会幹事会を催し、さらに6時より帝国農政協会の会合を開き、新加入者勧誘を申し合わせなどした。4日は皇太子殿下結婚の宮中大饗宴があり、参内し、午後2時からは帝国ホテルにて中正倶楽部の会合に出席し、さらに5時からは温らが呼びかけた中立農業議員会の会合を帝国農会にて開き、12名が参加し、瑞穂会を結成し、温と山口左一、松山兼三郎の3人が幹事に就任した。5日は東京市主催の皇太子殿下御成婚奉祝会に出席し、後、帝農に出勤し、「帝国農会報」の原稿（「総選挙の雑感」）を執筆し、午後6時から温が呼びかけた県選出代議士懇親会を帝国ホテルにて開催した（高山、河上、佐々木、杉が出席）。6日は帝農に出勤し、「総選挙の雑感」を書き上げ、午後2時から帝農ホテルにて開催の中正倶楽部代議士会に出て、組閣問題、普選問題、外交問題の討議を行い、普選と外交問題について委員会を組織し、温は外交部委員となった。7日は、温のために在京の同窓・先輩たちが目黒の大黒屋にて祝賀会を開いてくれ、出席した。8日は「農政研究」の原稿（「立候補より当選迄」）を執筆し、また、夜は矢作副会長と協議。9日は農業経営設計書の手入を行い、午後6時から帝農経済会議の農業部の委員を鉄道協会に招待。10日は「選挙と農村

31) 『帝国農会史稿 資料編』1012頁。

32) 中正倶楽部は無所属議員を中心に39名をもって組織（『議会制度百年史 院内会派 編 衆議院の部』298頁）。

33) 岡山県選出の衆議院議員。無所属。明治19年生まれ、41年東京帝大農科大学卒業。

問題」の訂正や生産費調査の集計様式を考案するなど、多忙であった。

6月11日、総選挙結果をうけて、護憲3派内閣が成立した。首相は第1党の憲政会総裁加藤高明が就任し、また、政友会より高橋是清が農商務大臣に、革新俱樂部より犬養毅が逓信大臣に入閣した。

護憲3派内閣下、温は衆議院議員として、帝農幹事として多忙であった。11日、温は中正倶楽部の茶話会に出席。13日は帝農の東部販売斡旋処会議、農業経営設計書研究会に出席。14日は中正倶楽部の外交委員会に出席。15日は「立候補より当選まで」を執筆し、また、午後6時から加藤高明首相の招待会（中正倶楽部、実業同志会、無所属）に出席。16日は農業経営指導者講習会発会式に出席。17日から19日までは八基村産業基本調査のため出張し、集計に従事し、20日に帰京した。21日は文部省を訪問し、岡田良平文部大臣及松浦鎮次郎次官に面会し、実科問題につき陳述。終わって、帝農にて、農家負担問題の協議。22日は八基村産業調査の原稿執筆。24日中正倶楽部の外交委員会と代議士会に出席、そして、全院委員長には中正倶楽部の若尾璋八（山梨県選出）を推すことを決定、等々。

6月25日に加藤内閣下の第49特別議会（6月28日開会、7月18日閉会）が召集された。温は9時登院し、書類及び徽章等を受け取った。10時開会され、議長、副議長選挙があり、議長に粕谷義三、副議長に小泉又次郎が選出されている。26日は帝国議会休日。27日は9時より中正倶楽部の代議士会に出席し、10時より帝国議会が開会され、出席。議長の挨拶及び各議員の部属、役員を決定した。その後、午後6時より農政研究会の世話人（各派の有力な農業議員、八田、東、長田、山内、荒川、川崎、高田、西村、山口、松山等が出席）の会合があり、出席した。この会合で7月4日に農政研究会の総会を開くこと、農村振興建議案を一致して提出することを申しあわせている。28日、帝国議会の開院式が貴族院にて開かれた。この日の「日記」に「帝国議会開院式。十時登院…。通常礼服…。貴族院ニテ十一時摂政官殿下御臨場ニテ挙式…。殿下ハ玉座ノ右ノ稍小形ノ椅子ニ着カル。式畢ツテ勅語、奉答文ノ委員十八名

ヲ指名シ、別室ニテ起草シ、議場ニ奉告シ、右ニテ閉会」とある。後、温は中正倶楽部の外交代議士会に出席した。29日午前10時より鉄道協会にて、全国農政諸団体の会合があり、今回の選挙運動の中心人物が集まり、温も出席した。30日本会議が開かれ、全院委員長選挙、常任委員選挙があり、全院委員長には中正会の若尾璋八が311名の多数にて選出された。また、午後5時より第2回瑞穂会を開会し、13名が出席し、農村問題の討議を行っている。

7月1日、本会議が開かれ、加藤高明首相、幣原喜重郎外相、浜口雄幸蔵相の演説があり、それに対し、野党の政友本党の元田肇、松田源治、中村啓次郎らの質問、政府攻撃がなされた。2日、登院し、午前は中正倶楽部の代議士会に出席し、普通選挙問題を討議し、午後は本会議に出席した。この日の本会議では、実業同志会の武藤山治、中正倶楽部の坂東幸太郎らの質問があった。「日記」に「一時ヨリ開会。各派ノ質問アリ。本党ノ質問ハ政府攻撃ノミ。之ニ反シ、中立ノ武藤氏ト中正ノ坂東氏ノ質問ハ政策ナリシヲ以テ有益ナリシ」と記している。なお、この日、政友本党が6月27日の申し合わせにかかわらず、単独で「農村振興に関する建議案」を提出している³⁴⁾

7月3日、午前は全国農政協会理事会を開き、全国から28県の理事が来会し、臨時議会对策（農村振興に関する建議案）を討議している。温は午後は本会議に出て、また帝農に帰り、全国農政協会の委員会に出席し、成案を得、米穀法の改正、関税改正などの理由書を作成している。4日も午前は全国農政協会理事会を開会し、委員会の決議通りの議案を決定し、実行委員9県を決めた。そして、午後3時より農政研究会各派幹部会を開いたが、政友本党側の委員から異論が出て、全国農政協会決議通りには決まらず、成案が得られなかった。午後5時より帝国農会にて農政研究会総会を開催した。議員が160名余りが出席し、全国農政協会理事を合わせて200余名の盛況であった。矢作副会長が会長席につき、会則、常任幹事22名を選出し、ここに議案を托することにした。

34) 『大日本帝国議会誌』第15巻、198頁。

5日は午前10時から図書館にて農政研究会当番幹事会を開き、農村振興建議案の打ち合わせを行った。この会合に政友本党は参加せず、4派連合（憲政、政友、革新倶楽部、中正倶楽部）で「農村振興に関する建議案」を提出することになった。なお、提出者は東武、八田宗吉、長田桃蔵、河上哲太、山内範蔵（以上、政友）、川崎安之助、高田耘平、川崎克、荒川五郎、谷口宇右衛門、村山喜一郎（以上、憲政）、西村丹次郎、土居権大（以上、革新倶楽部）、山口左一、松山兼三郎、岡田温（以上、中正倶楽部）、有馬頼寧（無所属）の17名であった³⁵⁾この日の「日記」に「午前十時登院、図書館ニテ農政研究会当番幹事会ヲ開キ、農村振興建議案ノ打合ヲナス。本党ハ加ハラズ。四派連合ニテ提出スルコト、ス。一方運動委員ハ各派幹部及当局大臣ヘ陳情ス。…午後本会議…。農村振興建議ト小作調停法ノ件ニテアチコチ奔走シ、…閉会后、中正会代議士会ヲ開キ、農村振興建議案ニツキ討議シ、自分ノ主張ノ如ク四派協調ト決ス」とある。このように、4派連合の農村振興建議案提出にあたり、温の尽力大であったことが判明しよう。また、この日、政府は第46議会で提出したが、委員会で審議未了となった「小作調停法案」を再度提出している。

7月7日は郷里の南吉井村長の西良実が上京し、温に重信川改修工事の建議の依頼があり、河上哲夫代議士とともに協議した。8日は10時に登院し、温は重信川改修工事の請願書を提出した。また、午後1時より本会議があり、吉良元夫（政友本党）のワシントン条約にもとづく海軍軍艦廃棄処分に対抗する意見などがあつた。9日の本会議では「大正十三年度歳入歳出総予算追加案」が審議に付され、護憲3派の多数のもとで、可決され、温も賛成した。また、この日、本議会で最大の重要法案である政府提出の「小作調停法案」が審議に付され、野党の政友本党も賛成し、全会一致で通過した。温も賛成で、「日記」に「小作調停法通過、全院一致」と記している。11日は朝9時登院し、温は母校問題の建議案を作成し、提出した。また、この日午後の本会議にて政府提

35) 『大日本帝国議会誌』第15巻、217頁。

出の「贅沢品等輸入税に関する法律案」(10割増案)が審議に付され、与党側の賛成多数で通過した。12日12時登院し、中正倶楽部の代議士会に出席し、政府提出の「復興貯蓄債券法案」への態度を決め、本会議に出席した。同法案は農村より無理に募集しないこと、集金は半額を地方産業に用いること条件付で可決された。13日は本会議なく、午後帝国農会にて交友会総会があり、出席した。14日も本会議なく、帝農に出勤し、午後5時から帝国ホテルにて農政研究会の幹部22名を招待した。15日は午前中は帝国農会にて各府県農業経営調査主任会議を開催し、説明及び議長を務め、午後は本会議に出席した。この日、政友本党の議員提出「農村振興に関する建議案」(床次竹二郎外17名)と4派連合の議員提出「農村振興に関する建議案」(東武外16名)が本会議に上程された。政友本党の建議案は抽象的であったが、4派連合の建議案は、1.農務省の独立、2.農家負担の軽減、3.米穀法及関稅定率法改正、4.自作農の維持及創定、5.農業金融の充実、6.農業倉庫の普及及充実、7.農業教育の改善、8.義務教育費国庫負担の増額³⁶⁾と具体的であった。この日の「日記」に「農村振興ノ建議出ツ。本党ハ川原茂輔氏、連合ハ高田耘平氏説明ス。高田氏ハ詳説シ、農民ノタメ氣焰ヲ上ク」と記している。この2つの建議案が委員会に付託された。理事は、5派から降旗元太郎(憲政)、谷口宇右衛門(憲政)、山田範造(政友)、原田佐之治(政友本党)、岡田温(中正倶楽部)、土井権大(革新倶楽部)が選ばれ、委員長は降旗がなった。

7月16日、温は9時半登院し、農村振興に関する建議委員会に出席。正午は帝農に行き、農業経営主任会議に出席し、趣旨説明を行い、再び、午後2時より農村振興の建議委員会に出席した。委員会では、政友本党との協調ができず、4派連合案が可決された。17日温は午前8時40分登院し、農政研究会の総会を開いたが、成立しなかった。午後本会議があり、降旗委員長より農村振興に関する建議案の委員会報告がなされたが、降旗委員長が政友本党の建議案

36)『大日本帝国議会議』第15巻、329頁。

の理由書を読まなかったために、大紛擾した。また、政友本党が農村振興建議案をより強化する修正案を出した。しかし、修正案は少数で否決され、その後、政友本党側が次善をとるといい、賛成し、結局、満場一致にて可決された³⁷⁾。この日の「日記」に「午后本会…、三、四ノ質問演説アリ。農村振興案ニ入り、降旗委員長本党案ノ理由書ヲ読マサリシヲ機会ニ、本党大ニ弥次リ大紛擾。委員長立往生…休憩。再会、委員長簡單ニ報告ヲ終リ、質問アリ。本党ノ修正及之ニ対スル賛否ノ演説アリ。修正案倒レタルヲ以テ、本党ハ更ニ原案賛…即、全院一致…中立ニ不賛成アリニテ通過ス…。要スルニ不真面目ナリ」とある。

7月18日は第49特別議会の最終日で、午前10時に登院し、本会議では種々建議案が可決され、また、温提出の東京帝国大学農学部実科に関する建議案も即決、可決された。19日に閉院式、首相の招待会があった。午後5時より赤坂高砂にて中正倶楽部懇親会があり、出席した。

7月21日、温は新潟県柏崎町に農業夏季大学講習のために出張した。この日、午後8時20分上野発にて、新潟に向かい、翌22日朝6時柏崎町に着いた。そして、柏崎町小学校にて午前9時から午後4時まで農業経営について講義を行った。翌23日は加茂町に行き、同小学校にて、150余名に対し、午後3時より5時まで食糧政策について講演した。24日は大野村に行き、同小学校にて3時間講演した。終わって、帰京の途につき、翌25日午前8時帰宅した。この日は終日八基村産業調査の編集を行った。26日は帝農に出勤し、郷里より東予煙害事件について、一色耕平（壬生川町長）らが上京し、住友の煙突改造について農商務省に行き、ともに陳情を行った。27日は八基村基本調査編集を行った。

7月29日、温は、富山県に出張した。この日、午後6時上野を出発し、翌30日富山県射水郡小杉町に着した。10時から射水郡農政会が小杉町光胎寺にて創立され、温が午後1時間余り、講演した。終わって千紫万江楼にて一同懇

37) 『大日本帝国議会誌』第15巻、378頁。

親会。31日朝、温は射水郡大門町を出発し、大阪に行き、午後9時発の第18共同丸にて、徳島県で開催の帝国農会講習会講義のために小松島町に向かった。温は船中にて、農村振興建議案の批判を草している。翌8月1日勝浦郡小松島町に着した。すでに矢作副会長が来ていて、温は矢作とともに、1日～4日まで小松島小学校にて講習、講義を行った。4日に修業証書授与式を行い、512名に証書授与した。5日は徳島県農会主催農会経営研究会に出席し、温は午前8時40分から12時まで農会経営について講演を行った。6日も農会経営研究会に出席し、種々意見を述べた。7日は八基村産業基本調査の結論部分を草し、午後10時発の新造船二十八共同丸にて山口県に向かった。8日朝7時天保山につき、梅田に行き、午前9時15分発の下関急行にて山口県に向かい、午後7時15分徳山町に着した。9日温は都濃郡鹿野村に行き、北部6カ町村の農会総代会にて、町村長、農会長ら300余名に対し、午前11時半から5時まで講義した。終わって慰労会に出席した。10日午前7時40分鹿野村を出て、松山に向かい、夜7時高浜に着した。高浜には、温の支持者（仙波、梅村、石丸、大原、松田、石井、その他、県農会職員等）が出迎え、商船会社楼上で演説会の打ち合わせを行い、帰宅した。

8月11日、温は県農会に行き、道後ホテルにて仙波、梅村、石井、大原らと会合し、温の議会報告会や県農会関係の講演日程を決めている。16日は県庁、市役所、県農会を訪問し、後、午後1時より道後ホテルにて温泉郡農友会幹事会に出席した（仙波、石丸その他25名出席）。17日、温は伊予郡郡中町に行き、午後から同劇場での伊予郡農友会総会に臨み、議会報告演説会を行った。終わって懇親会があり、各町村支部長40余名が出席した。18日は温泉郡北条町に行き、午後8時から同町大正座にて議会報告演説会を行い、宿泊した。19日、温は朝8時半の北条発相生丸にて尾道に行き、午後2時半尾道を発し、東上し、翌20日零時20分着京した。帝農に行き、農政研究会幹事会を開いた。この幹事会に川崎安之助（憲政）、八田宗吉（政友）、長田桃蔵（同）、松山常次郎（同）、三輪市太郎（政友本）、池田亀治（同）、東郷実（同）、山口

左一（中正倶楽部）の各幹事が出席し、農務省独立、米穀法改正、農家負担の軽減の3問題について当局に陳述することを決定した。翌21日、温は農政研究会幹事、矢作副会長らとともに、加藤首相、高橋農相、浜口蔵相の3大臣を訪問し、陳情した。また、この日、帝国農政協会委員会を開き、運動方法を協議し、22日に温は農政研究会委員会らとともに各政党本部を訪れ、陳情した。翌23日には、農政協会委員たちは、農商務省、大蔵省、内務省、文部省等を訪れ、陳情した。

大正13年は晴天の日々が続いていた。温の日記の天気欄を見ても、6月は晴か曇ばかりで、降雨は18日だけである。7月もひどく、15日に夕立があった程度で、晴天が続いた。8月も晴天が続き、漸く25~27日まとまった雨が降った程度であった。

8月27日、温は午後8時発にて京都、福井、香川、愛媛での講演、旱害地視察等のため出張した。28日午前8時半京都に着し、京都府農会にて開催の旱害地善後策協議会出席した。各県の被害状況を聞き、善後策を講じた。終わって、温は午後5時30分発にて講演のために福井に向かい、夜11時50分福井に着した。翌29日、温は坂井郡鶉村に行き、同村の小学校にて200余名に対し、2時間半ほど講演した。30日は福井県農政協会総会に出席し、最近の農政問題について報告した。終わって、温は午後1時50分発にて旱害地視察のため、高松に向かい、翌31日午前7時50分高松に着した。この日、温は、香川郡下笠居村、仲多度郡南村、丸亀市等の旱害地を視察した。下笠居村は10余町歩の旱害、南村は全村、丸亀市は局部的であったが、「激甚」であった。終わって、温は午後5時20分発にて、愛媛県での講演や業務のために、帰郷の途につき、この日は夜9時西条に着し宿泊した。

9月1日、温は西条公会堂にて新居浜郡農会主催農村経営講習会に出席し、午前9時より午後3時まで、500余名に対し、食糧政策（昨年の関東大震災時の政府の応急策としての米穀法の運用を取り上げ）について講演を行った。2日は新居郡泉川村に行き、農業学校にて午前10時より午後3時まで講演を行

い、翌3日午前西条を出て、小松に行き、同地からは自動車にて帰宅した。4日、温は午前は北伊予村に行き、同小学校にて300余名に対し、2時間ほど講演し、午後は石井村小学校に行き、苗代、紫雲英品評会授与式に出席し、講演した。さらに石井村農友会発会式にも参列した(400余名が出席)。5日は松山市長岩崎一高、愛媛県知事佐竹義文を訪問し、午後県公会堂にて、特別議会の報告演説会を開催し、会衆は800余名で、「非常ノ盛会」であった。6日は午前は石井村長、村会議員と県に行き、石井小学校増築の陳情をし、午後は松山市で開催の第23回愛媛県農事大会に出席し、温が約1時間半ほど農政問題の推移について講演を行った。帰宅しても忙しい日々が続いたことがわかる。翌7日も午前中は農事大会に出席した。

9月7日、温は東京での帝農活動に戻るために、午後1時上京の途についた。上京の途時、温は講演や旱害の被害状況の視察をした。8、9日の両日は広島県農会主催郡町農村農会職員講習会に出席し、朝9時から午後4時まで講義した。9日の夜は福山に行き、宿泊。10日は広島県深安郡加茂村の旱害状況を視察した。同村の稲は「枯死ニ瀕シ…収実ノ見込少ナシ」といった状況であった。次に岡山県に行き、小田郡笠岡町、川面村の旱害、未植地の被害状況を視察した。11日は岡山県児嶋郡灘崎村に行き、視察した。同村も未植地多く、「被害川面村ト伯仲ス」という状況であった。12日は兵庫県に行き、氷上郡竹田村と多紀郡今田村の旱害状況を視察した。竹田村の水田368町歩中、約200町歩は「収獲皆無」、今田村は竹田村よりさらに「激甚」という状況であった。13日は大阪に行き、中河内郡布施村、長瀬村の旱害状況を視察した。同村は旱害のため手入れをしなかったため、「収獲皆無多シ」という状況であった。終わって、奈良から京都に向かい、9時50分発にて上京につき、翌14日午前10時東京に着した。

9月14日午後、温は帝農に出勤した。このとき、矢作副会長より内藤友明参事の解職の話があり(理由は不明だが、以前から問題となっていた)、温に承諾を求めた。温は已むを得ずとして承諾している。また、この日幹事会があ

り、評議員会への提出議題を討議している。15日、16日帝農評議員会を開催した。17日は岡山県の早害の陳情員が帝農を訪問し、応対し、夜は講農会幹事会に出席した。18日は岡山県の早害陳情委員とともに大蔵省に陳情を行った。19日は原稿の執筆（「農政問題ニ対する難癖」）、また、矢作副会長、幹事とともに来る帝農総会提出建議案の検討を行った。

9月19日夜7時発にて、温は京都の宮津での講演のために出張の途につき、翌20日午前7時京都につき、宮津に向かい、0時40分宮津に着した。翌21日温は竹野郡深田村に行き、同村小学校にて、京都府農会主催の農談会に出席し、会衆700~800名に対し、午後2時間ほど現下の農政問題について講演を行った。終わって、6時宮津を出て、帰京の途につき、翌22日正午東京に着した。

9月23日午前9時40分発にて甲府に講習会のために出張した。翌24日朝、県庁に行き、県会議事堂における山梨県農会主催の農会経営講習会に出席し、各郡村農会関係有志、小作組合長等200余名に対し、朝9時から午後4時まで講義した。終わって中巨摩郡池田村を視察した。翌25日も午前9時から午後3時まで講義し、終わって勝沼町の葡萄園等を視察した。その夜11時50分発にて帰京の途につき、翌26日午前5時半帰宅した。

9月27日は午前7時に東京を出て神奈川県に出張し、平塚町で午後3時半から来会者50余名に対し、「産業の発展と農村問題」と題して1時間半ほど講演し、終わって、伊勢原町に行き、同町の小学校にて午後9時半から12時まで、来会者240余名に対し、同様の講演を行った。28日は午前大山町の水害地を視察し、午後は泰野町に行き、同小学校にて、来会者220余名に対し講演を行い、終わって、藤沢町に行き、同窓会に臨席し、12時東京に帰っている。以上のように、9月は出張、講演が多く、ことのほか多忙であった。

10月、温は帝農の業務や原稿の執筆、帝国農会総会の準備、総会に提出する建議案の執筆等に従事した。1日、2日は米生産費調査の検討、3日は内務省に行き、社会事業の調査、4日は午前早害地救済に関する建議案を執筆し、

午後は矢作副会長、桑田、志村、幹事らと自作農創設建議案について協議した。5日は小麦の輸入税の建議案（「小麦の輸入税増加は重要な農村振興策である」）を執筆し、6日は米生産費調査表の作成、また、安藤広太郎、有働良夫らを招き、帝農総会への建議案の協議し、7日は自作農創設建議案の執筆、8日は小麦関税問題および自作農創設建議案の執筆、9日は早害地救済に関する建議案の改作、10日は文部省、通信省訪問、11日は農業統計改正案の作成、また、この日、横井、山崎氏来会し、農村教育問題と移民問題について協議した。12日は米専売反対論等を執筆。13日は米専売反対の原稿を古瀬伝蔵（農政研究主幹）に渡し、また、統計局訪問、14日は農村社会事業奨励に関する建議案を執筆、15日は米の生産費についての原稿執筆、16日は農業統計改善に関する建議についての協議会に出席、17日は新嘗祭にて終日在宅。夜、駒場に原熙先生を訪問した。温は「日記」に「例ニヨリ不快ヲ感ス」とあり、相変わらず、温と原先生とはうまくいっていない。18日は農業統計改善の建議案を草了し、農政記者を集めて帝農総会に出す建議案を説明した。以上のごとく、建議案の多くを温が執筆していることが判明する。19日に帝農評議員会を開催し、帝農総会の議案の審議を終えた。

10月20日から23日まで、第15回帝国農会通常総会が開会された。総会には高橋是清農商務大臣も出席し、懇親会にも出て「機嫌良ク長演説ノ挨拶ヲナス」とある。帝農総会では、農商務大臣からの諮問「農家共助共営ノ精神ヲ鼓吹シ農業ニ関スル協力経営ヲ普及徹底セシムル方策如何」が出され、また、帝国農会側から17の建議案「米穀法改正並ニ米穀ニ関スル関税定率法改正ニ関する建議」「小麦ノ関税定率改正ニ関スル建議」「自作農維持及創設ニ関スル建議」「小作法制定ニ関スル建議」「農業者負担軽減ニ関スル建議」「農業低利資金ニ関スル建議」「農業倉庫ノ普及及充実ニ関スル建議」「早害地救済ニ関スル建議」「農村教育改善ニ関スル建議」「農村社会事業奨励ニ関スル建議」「衆議院議員選挙法改正ニ関スル建議」「内国拓殖事業振作ニ関スル建議」「用排水幹線改良ニ対スル国営及国庫補助増額ニ関スル建議」「農産物人工乾燥ニ関スル

建議」「国立農具研究所ノ設置ニ関スル建議」「農業統計の改善ニ関スル建議」「農業倉庫業法完成ニ関スル建議」が出され、委員会で審議され、可決されている³⁸⁾。温は農商務大臣の諮問と農業統計の委員会に出席し、「尤モ真面目ニ尤モ熱心ニ多クノ時間ヲ費シタルニ、凡々タル答申ヲ得タリ」と述べている。帝農総会の翌日の24日に農政研究幹事会があり、東武、長田桃蔵、山内範造、池田亀治、川崎安之助、荒川五郎、松山常次郎らが出席し、終わって、農相を訪問、建議について陳情した。26日は帝国農政協会総会を帝国農会にて開催し、愛媛県からは門田、武智、岡田らが出席した。会議はさしたる波乱なく終わり、委員は各政党本部を訪れ、陳情することを決めた。29日、温は千葉県君津郡榑村の重城氏の大経営を視察し、30日は休暇であったが出勤し、農業経営審査会の協議事項を起案、そして、31日は栃木県下都賀郡小野寺村の共同経営を視察した。

11月も温は種々、帝農の業務に従事した。1日は伯方村長の岡田喜一郎とともに通信省を訪問し、同村への融資を依頼、2日は高知県の視察団が帝農に來会し、温は一行に現今農政問題の傾向を説明、3日から6日まで帝農にて農業経営審査会開催し、設計書を検討するなどした。

11月8日夜8時半発にて温は松山への帰郷の途についた。汽車中にて八基村調査書の訂正をし、9日午後3時尾道から風雨激しい中、松山行きの船に乗り、10日未明高浜に着した。自宅に帰ってみれば一昨夜の暴風雨で、豆大の霰降り、粉が落ち、収穫不良であった。そこで、温は小作者と協議をなし、地主5割5分、小作4割5分に決めている。11日温は午後5時より久米村に行き、公会堂にて講演会を催した。秋収穫期であったが、200名ほど参加した。12日は仏事の用意、13日は亡父の13回忌仏事を執り行つた。14日は小作総代、永木、日野、勝田、柏恒一郎らが来て、温に小作料の減額を要求した。しかし、温は13年は先日決めた通りとして帰した。この日の「日記」に「段下

38)『帝国農会史稿 資料編』798～819頁。

ハ明年ニシテ本年ハ先日極メタル通りニテ此上要求セサルヲ可トスヘシト説シテ帰ス」とある。

11月15日、温は10時石井発にて、東京での業務のために上京の途につき、第15相生丸に乗り、尾道に行き、5時20分発にて東上し、翌16日午後1時東京に着した。

11月17日、温は午前8時50分発にて埼玉県大里郡八基村へ出張し、午後1時より図書館にて八基村産業基本調査の報告会を行った。このとき、渋沢栄一子爵も参列した。翌18日渋沢子爵と談じ、子爵の生い立ち、出家前後の状況を聞いている。そして、12時帰京に着いた。19日は午後5時より神田学士会館における農業経済学会発起人会に出席。20日以降も帝農に出勤、雑務や原稿を執筆。

11月25日10時より帝農にて、帝国農政協会運動委員会を開き、運動を協議し、翌26日、農政協会の運動委員たちは大蔵、農商務、文部省や各政党を訪問、陳情した。また、この日温は6時より中央帝にて、帝国農政協会、町村長会、教育会の代表者の会合に出席し、3団体の連合会の組織を決め、宣言及び決議事項を決定している。そして、27日に3団体の代表者とともに4政党の幹部を訪問し、陳情した。28日は中正倶楽部の代議士会を開催し、小学校教育費と移民問題とを討議した。29日は憲政会本部を訪問、30日は千葉県に行き、山武郡農政協会総会に出席し、来会者140余名に対し、講演した。

12月も温は帝農の業務、農業経営の視察・出張、帝国農政協会の運動等多忙であった。1日は農業経営審査特別委員会を開き(横井、安藤、佐藤ら出席)協議し、2日は午前は中央蚕糸会の会議に出席し、午後から農業経営視察の出張の途についた。3日は群馬県太湖町の横堀氏の農業経営を視察、4日は栃木県下都賀郡中村の神山原治の農業経営(6町歩)を視察、5日は山形県中郡の寒河江一郎の農業経営(6町歩)を視察し、終わって夜帰京の途につき、翌6日午前5時50分帰京した。7日は終日在宅し、土地国有化反対論の原稿を執筆。8日は中央報徳会に行き、野口(教育会)、繁田(町村長会)、福井の諸氏

と義務教育費国庫負担増加の運動法を協議する。9日も中央亭にて野口、繁田、福井の諸氏らと義務教育費運動の相談をする。そして、10日に繁田、野口らが政友本党を訪問し、陳情している。この日、温は中正倶楽部政務調査会があり、出席。11日は矢作副会長が帝農に來会し、温と種々協議ししている。矢作副会長は、義務教育費国庫負担増加運動にかんし、帝国農会が教育会や町村長会と連合して運動していることに対し、内閣が倒壊する恐れがあると懸念し、好まぬ態度であった。この日の「日記」に「副会長來会、種々相談ス。副会長ハ運動ニ教育会及町村長会ト連合ヲ好マヌ風アリ。又内閣倒壊ニ至ラシムルヲ恐ル、風アリ」とある。12日、帝国農政協会の3県（兵庫、三重、岐阜）の運動委員が來会し、農商務省、政友本党を訪問し、陳情した。13日には、温は福田幹事と協議し、帝国農政協会の運動委員を招集すること（22日）、また、農政研究会幹事会を開くこと（24日）を決めている。15日、帝農評議員会を開催した。矢作副会長、志村源太郎、桑田熊藏、山口左一らが出席し、温は帝国農政協会の運動経過を報告した。16日は内務省、通信省を訪問し、農会費補助、郷里の魚成村への融資の件等を陳情した。17日は関税改正問題の論文を執筆し、また、高山代議士、村松恒一郎（前代議士）、井谷正命（元日吉村長、県議）らと宇和島鉄道の相談を行い、また、來会した高田耘平（憲政会代議士）と教育費補助問題について「密談」している。18日は高田、矢作副会長と会合、19日は文部省、農商務省訪問、20日は農党と農村問題の原稿執筆。21日は大木会長を訪問し、帝農の取り組んでいる問題の経過を話している。

12月22日、帝国農政協会実行委員会を召集した。秋田、千葉、埼玉、岐阜、三重、兵庫、岡山の運動委員が來会し、運動を協議し、來年1月25日に連合大会開催を決議した。23日には、帝農に、町村長会、教育会の代表が集まり、帝国農政協会連とともに政党を訪問し、陳情した。また、この日午後3時より、中央亭にて中正倶楽部の代議士会があり、ともに陳情した。

12月24日、護憲三派内閣下の第50帝国議会在が召集された。10時に開会し、

部員を定め、温は予算委員となる。午後帝国農政協会委員会を開き、来年の1月に農政大会を開くこと、3団体の連合大会を開くことなどを決めた。さらに、午後5時より農政研究会幹事会を開き、当面の農政問題を協議した。26日貴族院にて帝国議会の開院式が挙行され、出席した。摂政宮が臨台し、勅語を述べ、終わって、勅語奉答文の起草委員を選び、箕浦勝人委員長が案文を朗読し、起立により採決し、閉会。その後、中正俱樂部代議士会に出席し、義務教育費国庫負担法中改正法律案は政友本党と離れて提案することに決定した。27日、11時登院、全院委員長選挙、常任委員の選挙がなされた。全院委員長に佐々木平次郎が選出され、温は予算委員理事に当選した。この日、貴族院改正問題について政友本党から緊急質問が出て、加藤総理の出席を求め、紛糾している。「日記」に「貴族院改正問題ニテ大騒トナル。…午後八時半未タ閉会トナラザリシガ帰宅シ、帰国ノ準備ヲナス」とある。28日から議会は休会となった。この日の朝、温は矢作副会長の宅に挨拶に行き、午後8時半東京発にて帰国の途についた。翌29日午後9時帰宅した。30日出市し、買物をし、仙波茂三郎、石丸富太郎へ反物を、重松亀代、大原利一、玉井、石井信光へ砂糖桶を送っている。31日は迎年祭神の準備をした。この年末の「日記」に「相変ラス多忙ノ年ナリシ」とある。

第2節 講農会長、東京帝大農学部実科独立運動関係

温は講農会長を続けている。1月29日には講農会幹事会を開催。藤卷雪生(幹事長)、渡邊侯治、藤浪楠太郎、高洲俊介、牛嶋英喜、内藤友明、谷口俊一らが出席した。6月29日午後1時より帝国農会にて講農会総会を開いた。役員の変更を行い、温が会長を引き続き続けた。

温は引き続き、東京帝大農学部実科独立運動に取り組んだ。2月5日に、原鐵五郎及丸毛信勝と農商務省に西大路子爵に面会し、実科独立運動の打ち合わせをしている。

本年5月、温は衆議院議員に当選した。そして、7月11日、温は母校問題

建議案（東京帝国大学農学部実科に関する建議案）を第49特別議会に提出した。この日の「日記」に「九時登院…。小野重行君ト母校問題ノ建議案ヲ作成シ、提出者ヲ岡田温、小野重行、植原悦次郎、中村清造、湛増庸一、神村吉郎ノ六名トシ、七十余ノ賛成者ヲ署名シテ提出ス」とある。そして、この建議案は、18日の第49特別議会の最終日に、案は即決、可決されている。

10月9日は帝国農会にて交友会幹事会を開き、経過報告と内部改造運動の打合せを行う。

第3節 家族のことなど

家族関係では、長女の末光清香（明治28年3月21日生まれ、28歳）は末光家で、子供3人を育てている。

次女の禎子（明治35年2月2日生まれ、22歳）は、東京帝国大学心理学科の聴講生を続け、心理学を学び、また、戯曲を書いている。温は禎子に十八史略の講義を行っている記事がある（2月7日「禎子二十八史略ノ講義ヲ始ム」）。

4女の綾子（明治41年10月1日生まれ、15歳）は、愛媛県立松山高等女学校に通っている。

長男の慎吾（大正元年8月23日生まれ、11歳）は、石井小学校に通っている。温は慎吾に、「良友」や「小学五年生」「小学六年生」などの雑誌をよく東京から送っている。

温の妹のケイ（3女、明治18年1月23日生まれ、38歳）は麹町区三番町二八番地にすんでいる。